



TITLE:

お伽草子 -物語の玉手箱- 京都大学附属図書館創立百周年記念公開 展示会

AUTHOR(S):

CITATION:

お伽草子 -物語の玉手箱- 京都大学附属図書館創立百周年記念公開
展示会. 1999

ISSUE DATE:

1999-11-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/148396>

RIGHT:

京都大学附属図書館創立百周年記念公開展示会

お伽草子

—物語の玉手箱—



京都大学附属図書館

目 次

ごあいさつ	1
図版	2
お伽草子の世界へ	32
京都大学所蔵お伽草子目録	35
展示会の概要	62
展示一覧	63
あとがき	64

会期：1999年11月24日（水）～1999年12月7日（火）

会場：京都大学附属図書館展示ホール

表紙：きふね（京都大学総合人間学部蔵）

ごあいさつ

京都大学附属図書館は、今年創立百周年を迎えます。1897（明治30）年の京都帝国大学創立と同時に開設を準備し、2年後の1899（明治32）年12月11日に閲覧業務を開始しました。この閲覧開始の日をもって創立の日としています。

京都大学附属図書館では、毎年秋季に公開展示会をおこなっておりますが、今年は、特に創立百周年事業の一つとして位置づけ、「お伽草子」を取り上げました。開催期間は、創立記念日直前の2週間とし、11月29日（月）午前には記念式典、午後には京都府立大学池田敬子先生（京都大学大学院文学研究科国語学国文学専攻出身）の記念講演会「弁慶像の展開—御伽草子『弁慶物語』—」を開催いたします。

今回展示品として取り上げた「お伽草子」（おとぎぞうし）というのは、室町時代から江戸時代初期にかけて作られた物語草子の総称で、室町時代物語あるいは中世小説とも呼ばれ、およそ400種以上といわれていますが、京都大学の所蔵は、附属図書館、文学部、総合人間学部をあわせ90種、136点となります。今回は、京都大学所蔵の全作品を調査し、京都大学文学研究科国語学国文学研究室の協力を得て『京都大学所蔵お伽草子目録（解題付）』を作成いたしました。そしてこの調査を基礎に、美しく彩色された挿図の奈良絵本を中心に、約90点を展示いたします。

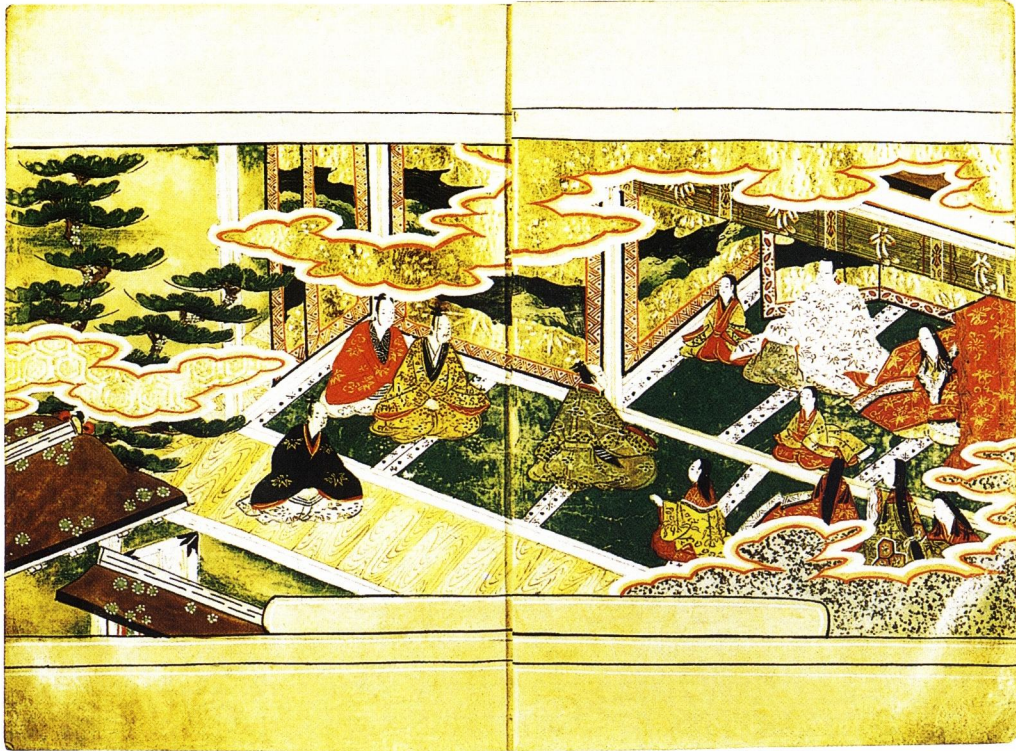
講演題目の弁慶はじめ、お伽草子の数々—、鉢かづき、物くさ太郎、一寸法師、浦島太郎などは、明治以降、子ども向けの「おとぎばなし」ともなって、現代日本人共通のなつかしい物語の記憶を形作っています。さらに実際のお伽草子は、公家物、宗教物、武家物、庶民物、外国物、異類物などの分類（市古貞次『御伽草子』岩波文庫、1985解説）に示されるように、一層多様な物語世界を展開し、古代から中世へと転換する日本社会の種々相のイメージを伝えてくれます。

浦島太郎は、「亀があたへしかたみの箱」を開けてみると、「中より紫の雲三すじ上りけり。是を見れば、二十四五の齢（よはひ）も、忽ちに変りはてにける」ということでしたが、私たちの場合は、果たしてどうか。晩秋から初冬、空の澄んだ京都の一日、「物語の玉手箱」を開けて、鮮やかな五彩（カラー）の雲に遊んでみてはいかがでしょうか。

1999（平成11）年11月

京都大学附属図書館

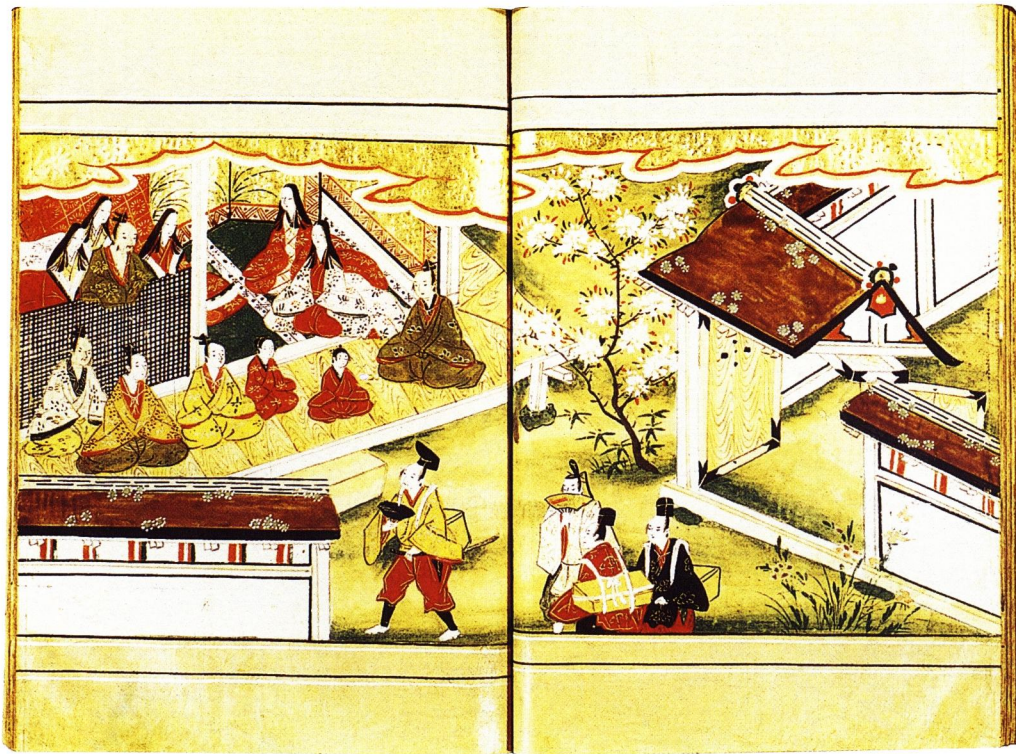
館長 菊池光造



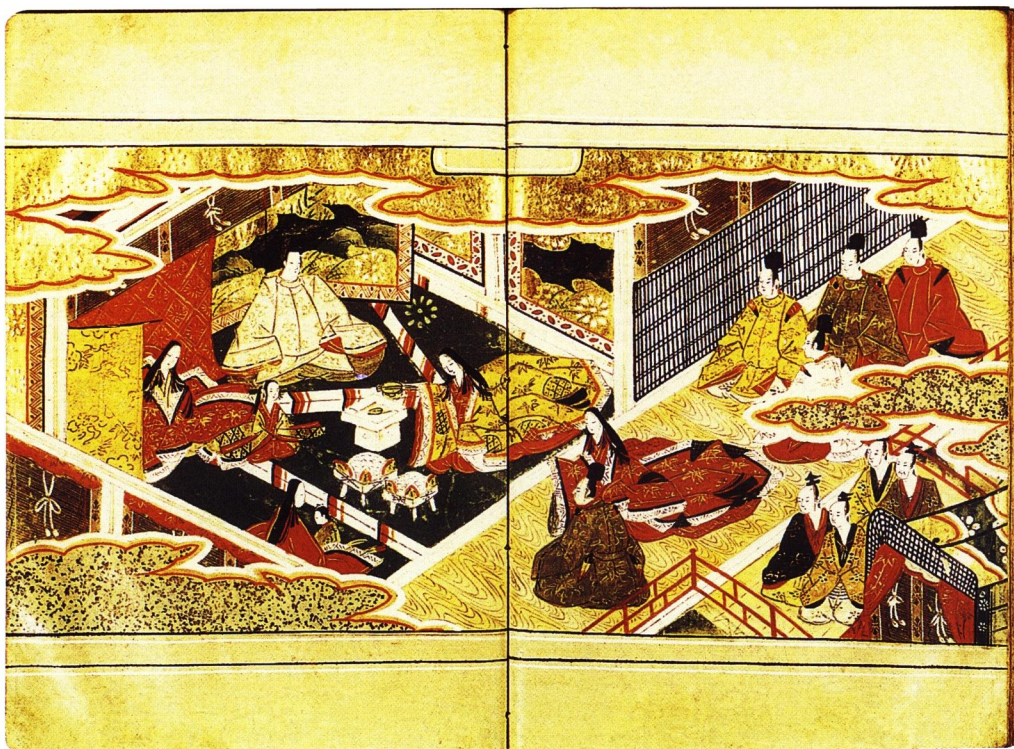
[42] しほやきぶんしやう



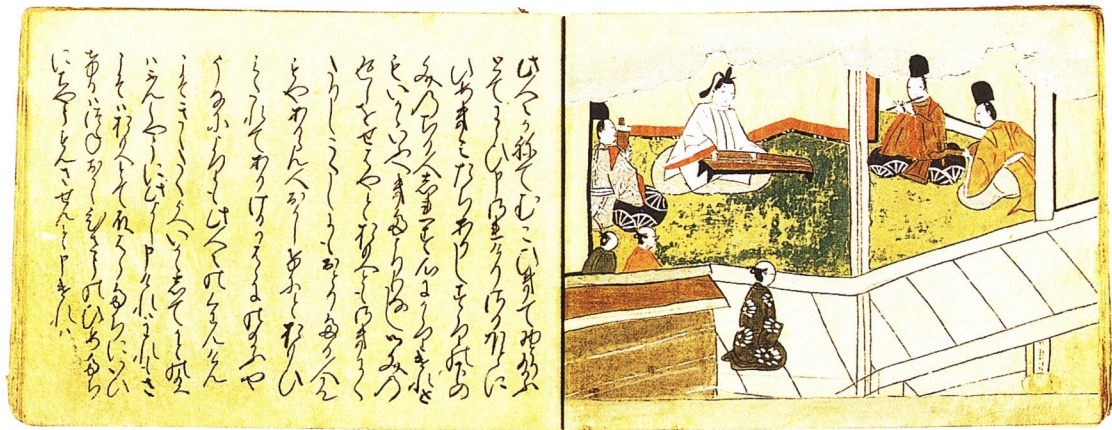
[42] しほやきぶんしやう



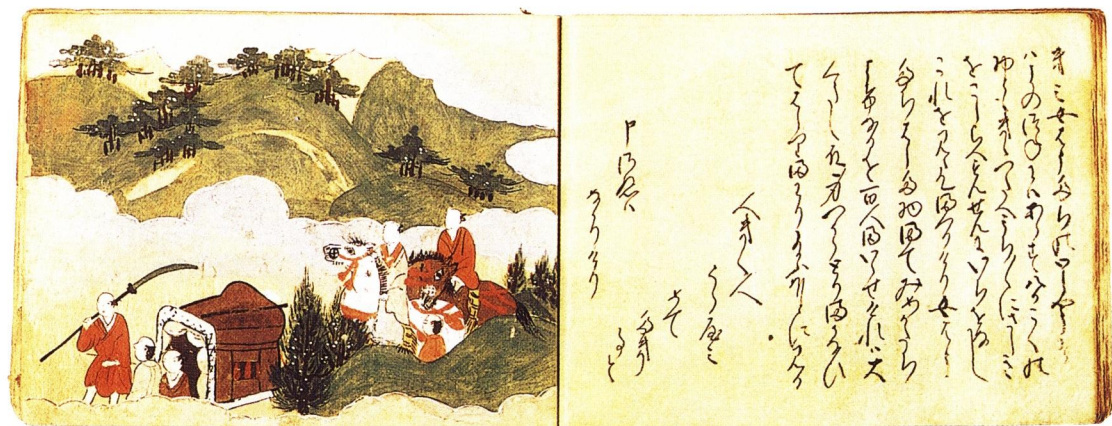
[42] しほやきぶんしやう



[42] しほやきぶんしやう



[95] ふんしやう



[95] ふんしやう

[illegible]

〔96〕 ふん正

[illegible]

〔96〕 ふん正



〔108〕 ほうらい物語



〔108〕 ほうらい物語

A colorful illustration of a Japanese boat with a large white sail, carrying several people in traditional clothing across stylized blue waves. In the background, there are green hills with traditional Japanese buildings and trees. The entire scene is framed by a yellow border with a floral pattern.

〔108〕 ほうらい物語

A colorful illustration from a Japanese book, likely a kabuki or bunraku scene. The scene is set on a green mat. In the center, a figure in a red and white costume is performing a dance or acrobatic feat, with one leg raised high. To the left, a figure in a yellow and white costume is seated, holding a fan. To the right, a figure in a red and white costume is seated on a checkered floor. In the foreground, three figures are seated, watching the performance. The background features a blue and white patterned wall and a checkered floor. The entire scene is framed by a yellow border with a floral pattern.

〔108〕 ほうらい物語



[39] さよひめ



[39] さよひめ



〔20〕 ぎわう



〔21〕 きわう物語



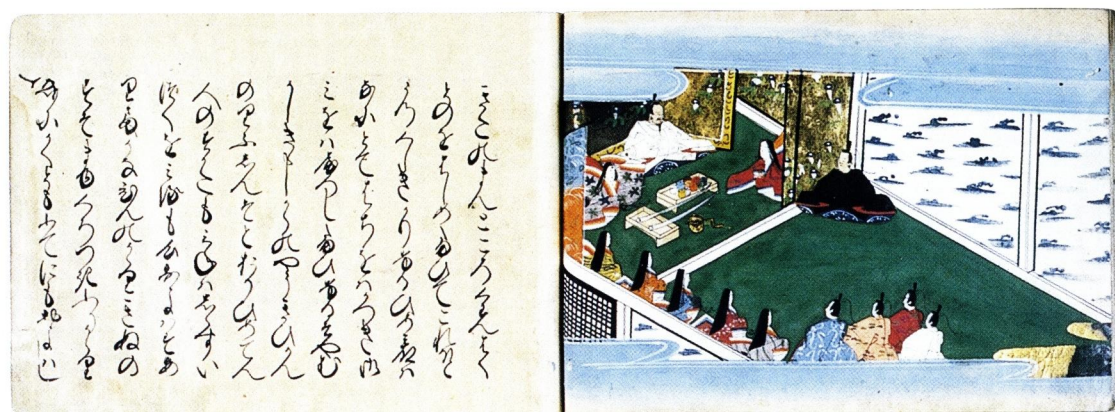
〔43〕 四十二の物あらそひ



〔43〕 四十二の物あらそひ



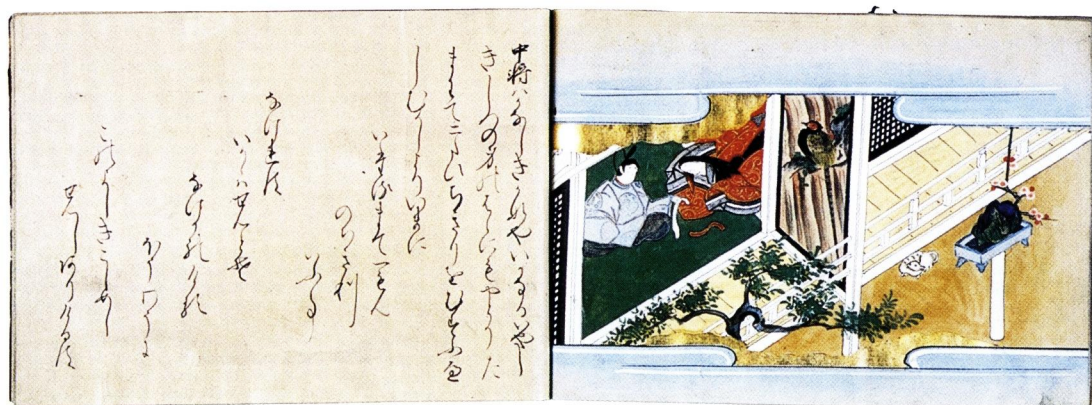
[77] はちかつき



[77] はちかつき



〔25〕 きふね



〔25〕 きふね



〔89〕 富士草帋



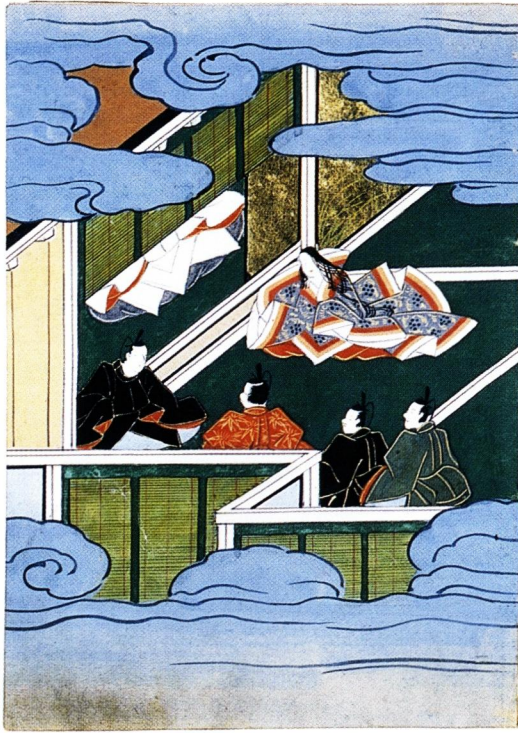




[89] 富士草帙



[89] 富士草帙

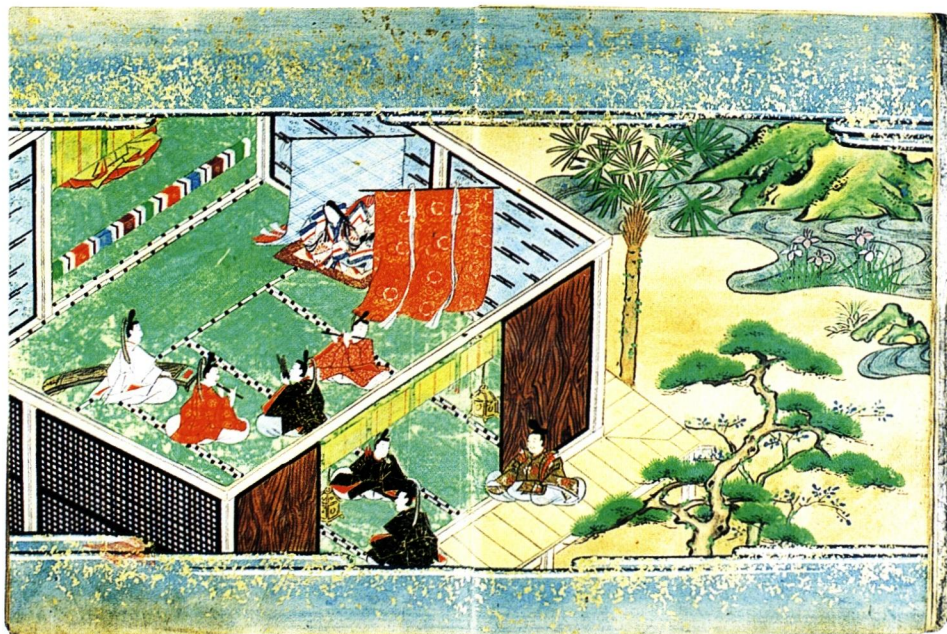


別にあのやういふこと
 くらうんのいふやうに
 屋のいふやういふこと
 くらうんのいふやうに
 しやうやういふやうに
 のいふやういふこと
 くらうんのいふやうに
 くらうんのいふやうに
 くらうんのいふやうに
 のいふやういふこと

〔61〕 玉ものまへ

[illegible]

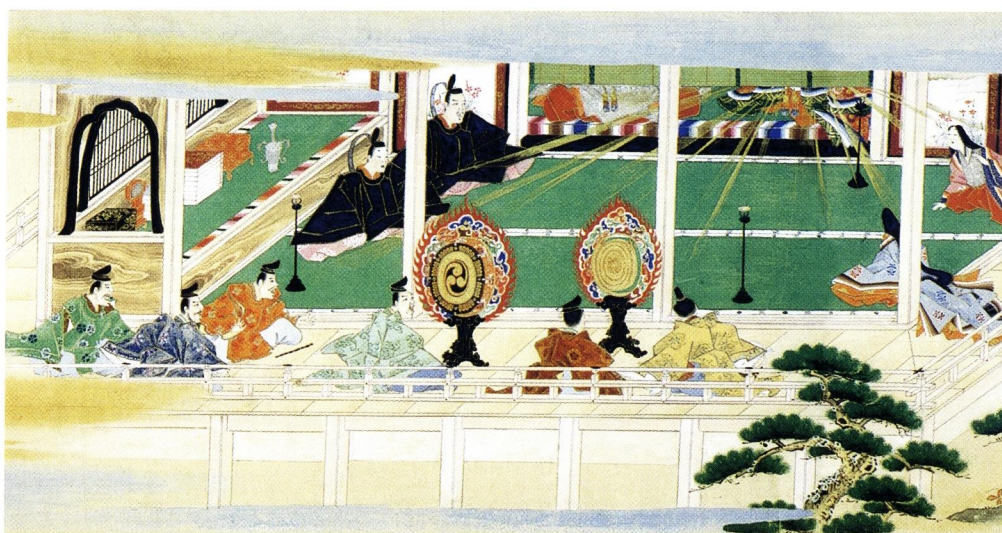
〔61〕 玉ものまへ



〔63〕 たまものまへ



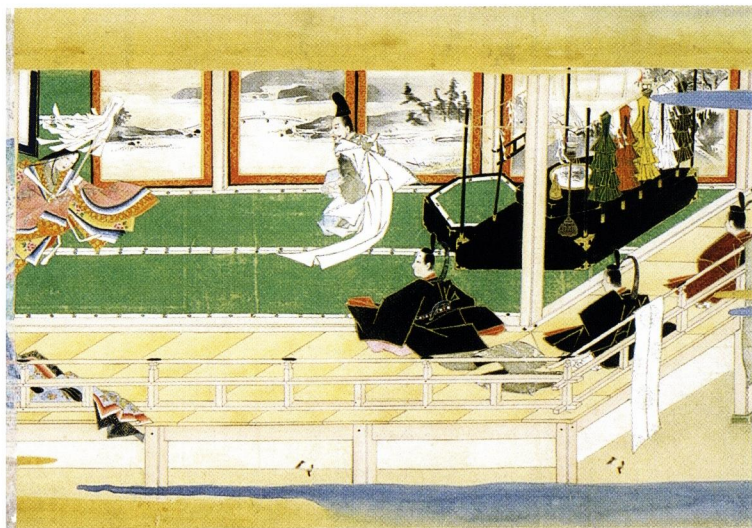
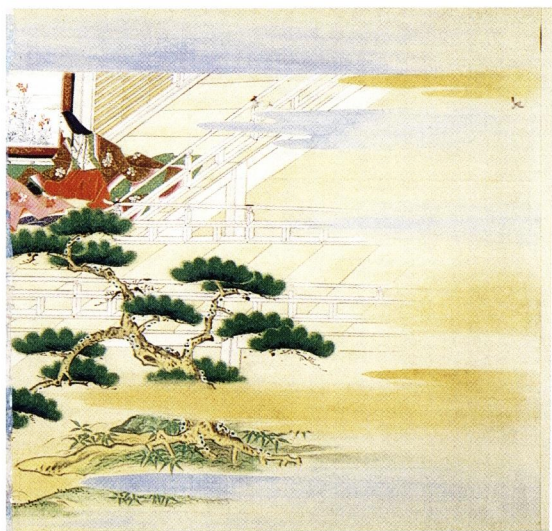
〔63〕 たまものまへ



〔62〕 たま藻のまへ



〔62〕 たま藻のまへ



〔62〕 たま藻のまへ



おれ大とて運ふにけり。聖徳太子を
あまのつらさけ成る日金づくまに、
わがうき世なり。心もさうふのたれい志業
やうにけり。海ものわづろはくいて
ひかまふ。院中若くよふ。あゝそね
えね。ゆめ人。北ふ。紫れ。南延
陽て。大進物や名はあ。一紙瓶の
根えて。ふは。あ。あ。あ。あ。あ。
ま。あ。あ。あ。あ。あ。記。祿。あ。一。瓶。
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。



〔67〕 付喪神



〔67〕 付喪神



〔29〕 車僧/巻物



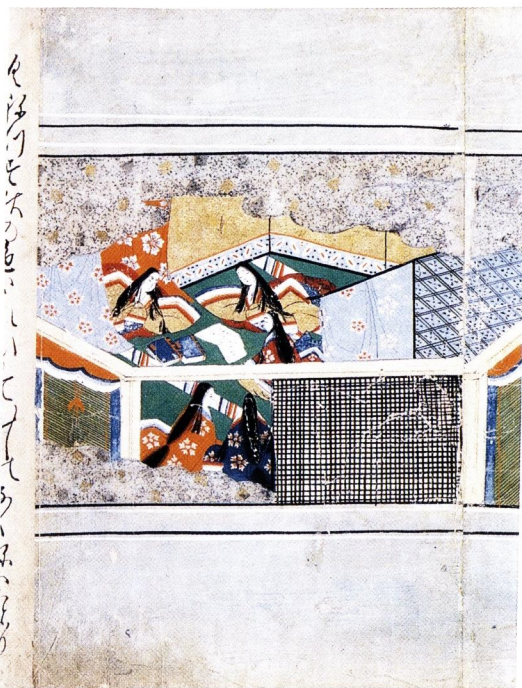
〔29〕 車僧/巻物



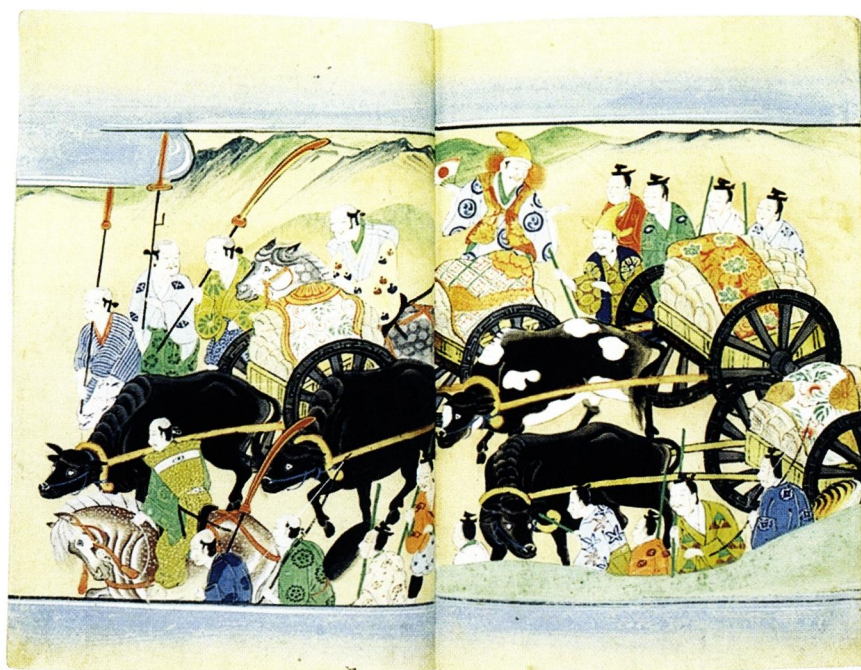
[115] しつか



[115] しつか



[115] しつか



〔116〕 糸ほしおりさうし



〔116〕 糸ほしおりさうし

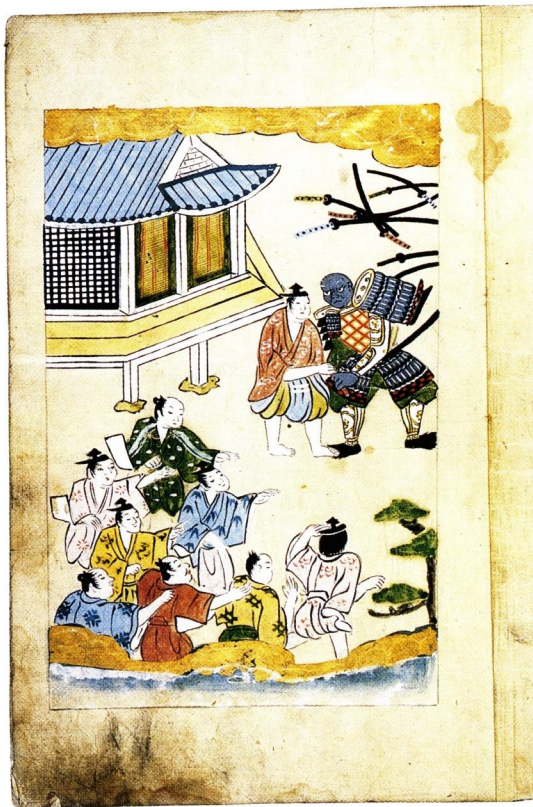


[116] 糸ほしおりさうし



[116] 糸ほしおりさうし

〔100〕 弁慶物語

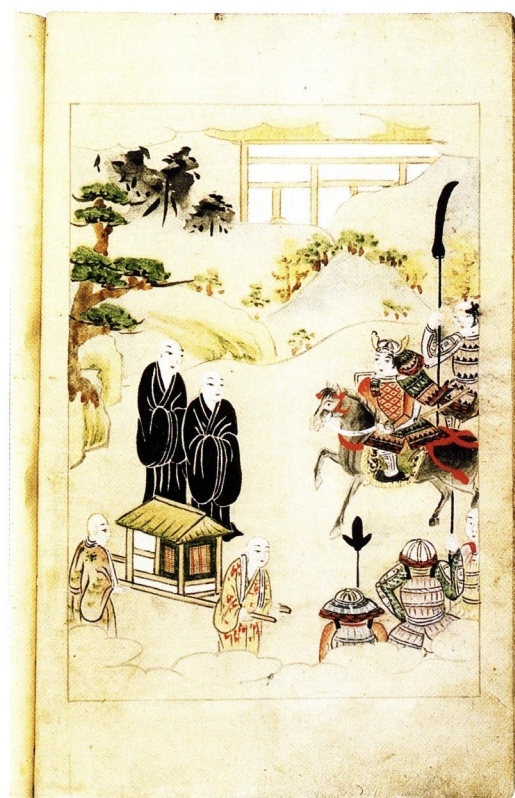


弁慶は、この時、
 大活躍の場を
 迎へた。この
 時、彼は、
 大活躍の場を
 迎へた。この
 時、彼は、
 大活躍の場を
 迎へた。

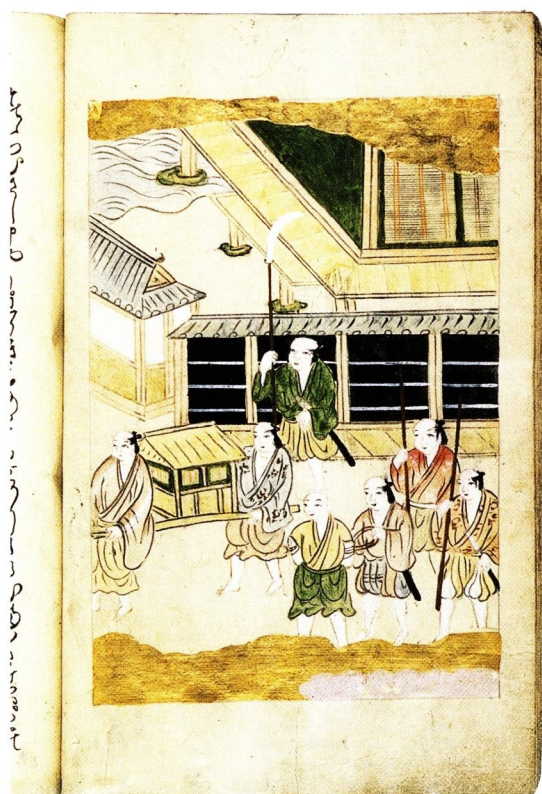
〔100〕 弁慶物語



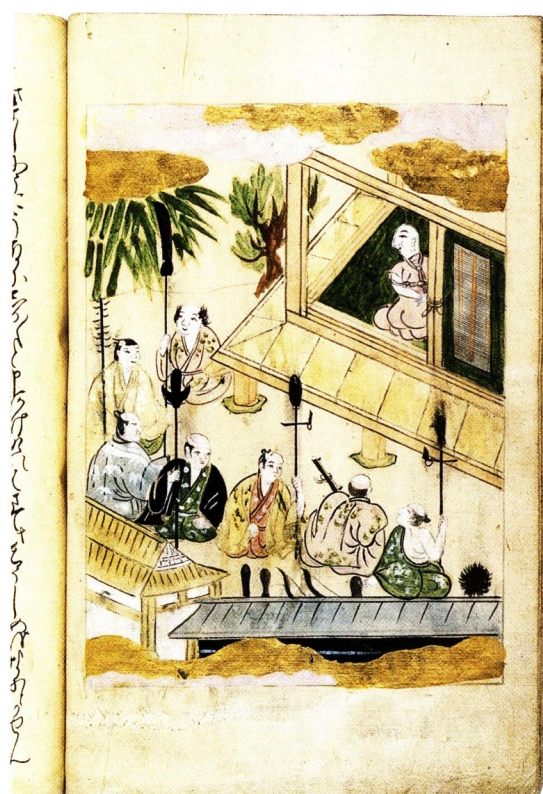
〔100〕 弁慶物語



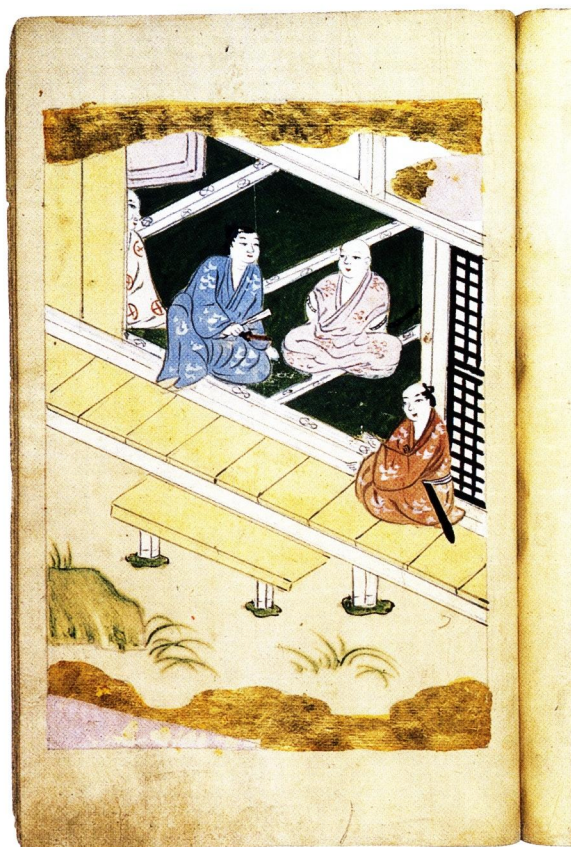
〔100〕 弁慶物語



〔100〕 弁慶物語



〔100〕 弁慶物語



〔100〕 弁慶物語



見たりとてはなれりや
はなれりやとてはなれりや
はなれりやとてはなれりや
はなれりやとてはなれりや
はなれりやとてはなれりや
はなれりやとてはなれりや
はなれりやとてはなれりや
はなれりやとてはなれりや
はなれりやとてはなれりや
はなれりやとてはなれりや

〔100〕 弁慶物語



〔100〕 弁慶物語



〔100〕 弁慶物語

お伽草子の世界へ

柴 田 芳 成

(京都大学大学院文学研究科
国語学国文学専修)

「お伽草子」とは室町時代から江戸時代の初期にかけて作られた、四百種余りの比較的短編の物語を広くさしている言葉です。今から五、六百年前の人々の間で生まれ、育てられた様々な物語の全体です。「御伽草子」という言葉は江戸時代から使われているのですが、現代語に訳して「おとぎ話」、という訳にはいきません。「おとぎ話」では収まりきらない、あらゆる物語が含まれているといってもよいでしょう。そしてそれぞれの物語のそこに当時の人々の思いが見え隠れしています。

その多岐にわたる物語の全体像を捉えるため、色々な分類方法が考えられてきました。現在では物語の主人公や舞台に注目して六つに分けるのが一般的になっています。では今回の展示作品にふれながらそれらを紹介していきましょう。

- 1 公家物…主人公を貴公子や姫君とした作品で、平安時代以来の物語に通じるといえます。先行する作品に倣ってよく似た構想の物語が作られることも多かったようで『しのひね物語』と『雨やどり（しぐれ）』『緑弥生』は一つのグループをなしています。『鉢かづき』『いはや』などの継子物も人気のあった物語です。また歌人や和歌說話を基にしたものもここに含めて考えます。
- 2 宗教物…僧侶を主人公とし、稚児との恋愛を描く『秋の夜長物語』『花みつ』や発心の次第が語られる『くるま僧』があります。人間として苦悩を経験した神仏の起源を語る『くま野』『きふねの本地』など本地物と呼ばれる作品も数多く、この時代を代表するものです。
- 3 武家物…武士を主人公としたもので、平家物語に取材した『ぎわう』のほか、特に人気のあった義経、弁慶に関しては『しやうるり』『弁慶物語』があります。また『はもち中納言』では地方武士が主人公です。この方面は語り物との関係が深いのですが、特別展示される『しつか』『ゑほしおりさうし』もその内の幸若舞曲とよばれる作品です。
- 4 庶民物…上の1、2、3に属さない庶民を主人公とした作品。それまでの文学作品の中には登場することすらなかった人々が主人公として描かれています。『ふんしやう』や『物くさ太郎』『さるげんじ』などは立身出世を語ります。『浦島太郎』『一寸法師』（御伽文庫）などのように現在も昔話として知られるものもあります。
- 5 異国・異郷物…物語の舞台を日本以外とするもの。『二十四孝』『蛤の草子』（御伽文庫）のように現実の外国である場合（異国）と『ほうらい』『ふじの人あなさうし』

のように空想上の地である場合（異郷）とがあります。

- 6 異類物…人間以外のものを主人公とした物語。人間との交渉を描く『雁のさうし』『玉水物語』がある一方で、動植物同士の恋愛（『ふくろふ』）や合戦（『あろ物語』『草木太平記』）、器物の発心（『付喪神』）を扱う作品群があります。

大まかな分類としては以上ようになりますが、実際にはそれぞれいくつかの要素が組合わされて作品を成り立たせています。このような分類は現在わたしたちが過去の文化を知る一方法として作り出したものであって、当時これらの物語に興味を抱いた人々がそれぞれの作品の性格についてどれほど自覚していたかはわかりません。当然のことながら物語としての面白さが一番の要件だったはずです。

「お伽草子」の全体像はさておくとして、一つ一つの物語はどのように語られているのでしょうか。室町時代に現代のわたしたちに直接通じてくるような文化の基礎が作られたといえます。日本語も例外ではありません。展示されているような文字を読みとっていくのは大変ですが、現代の文字に置き換えさえすれば、お伽草子の文章はそのまま読んでもなんとか理解することができます。そしてそこには何かしらリズムのようなものが感じられると思います。当時の読書の方法は黙読ではなく、音読が多かったと考えられており、物語は語られ、聞かれる作品としてあったのです。

そのような物語のあり方をうかがわせる特徴として、物語を紡いでいく語句の中には、繰り返しが多かったり、別々の作品なのによく似た言い回しがあったりします。たとえば、ある部屋の東西南北に春から冬まで一度に四季の景色が見渡せる場面、また意外な出来事に直面した主人公が思わずもらす「これは夢かや、うつつかや」というセリフなど、いくつか作品を眺めてみればすぐに出くわすことでしょう。現代的な感覚からすると芸がないようにも思えますが、それらの物語を育てた人々には落ち着いたよい表現だったのです。

さて物語を読み進めていくと、しばしば本来の物語の筋とは別に次々と小さな話題に行き当たることがあります。恋人への手紙の中に『伊勢物語』で有名な業平の例を引いたりするのがそれです。そういった話題には平安・鎌倉時代の作品や学問を踏まえたものもたくさん盛り込まれています。お伽草子には、それまでは限られた人たちしか知らなかった様々な知識を広く伝える教育的な役割もあったのです。『東勝寺鼠物語』の中で辞書のようにある事柄に関する言葉がいくつも並べ立てられているのもその表れです。

物語を読んで楽しいばかりでなく、それが何かのためになれば幸いです。物語の最後をめでたさや教訓めいた文句で結ぶ作品があります。いま例はあげませんが、そこにも当時の人々の間での物語の受け止められ方が見えてきます。

「お伽草子」はまた「庶民の文学」と呼ばれることもあります。それは庶民を中心に据える作品があるからだけではありません。ほとんどの作品で作者が分かっておらず、多くの人々の間で語り伝えられるなかで作られていった文学なのだということです。「お伽草子」が生まれた背景には、それまでは都近くか限られた地域だけで行われていた戦乱が日本全体を巻き込むほどに広がった時代、その一方で庶民が地道に力を付けつつあった社会がありました。それゆえ物語の中では、平和や豊かさへの願いとともに、庶民の明るい笑い声も包み込んだ世界が展開されていくのです。

では、わたしたちとのつながりはどうでしょう。前に庶民物の紹介にあげたように『浦島太郎』『一寸法師』といった昔話として知られる作品も中にはありますが、それはほん

の一部にすぎません。残念なことに現代のわたしたちはまるで知らない物語の方が多いのが事実です。今回の展示にあたっては、物語に添えられた絵を中心に見ていただくことを目指しました。添えられたといっても中には豪華な絵が中心であるような作品もあります。絵は物語の世界をイメージするのに役立ちます。展示された作品の中にも色々な種類の絵があります。本格的な大和絵の手法を取り入れているもの、お世辞にも上手とはいえないけれど愛らしさのただようもの、印刷され色がつけられたもの、などなど。そこにある文字は直接読めなくても、絵なら見ればわかります。これらの絵を前にした時こそ、わたしたちが時間の隔たりを飛び越えて当時の人々と最も近い位置で物語を鑑賞する瞬間になるのではないのでしょうか。

さあ色々な物語がつまった玉手箱は準備できました。あとはみなさんがそのふたを開けてくださるのを待つばかりです。

京都大学所蔵お伽草子目録

【凡例】

- ・本目録は松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』奈良絵本国際研究会編、1982.8、以下「簡明目録」と略称)に掲出された書名を京都大学の所蔵目録で検索することで作成した。ただし調査の過程で「簡明目録」掲出書以外に見出された本も目録作成者の判断で目録に加えた。その場合書名の右肩に*をつけた。
- ・翻刻、影印、複製などは目録から除外した。
- ・標題は原則として最初の首題(巻頭題)に拠った。
- ・配列は書名の五十音順とした。ただし同一書名のものは附属図書館(「附図」と略称)、文学部国文学、文学部美学、文学部印度哲学(「印哲」と略称)、総合人間学部図書館の順に並べ、同一所蔵中は分類番号順(特殊文庫は後掲)とした。
- ・明治以後の写本、模本については書誌的事項を省略した。
- ・書名著者名及び出版等の事項中 [] 内の記述は、当該資料には表示がなく、推量あるいは他の資料に拠ったものである。
- ・書名等の変体仮名による表示は平仮名になおして記録した。
- ・大きさは冊子の場合は縦×横、軸物の場合は紙高をさす。
- ・装丁用語には諸説分かれるものがあるが、ここに用いる「大和綴」は列帖装あるいは綴葉装とも呼ばれるものをさす。
- ・翻刻は参照しやすいものを適宜挙げるもので、網羅的なものではない。昭和以降に発行されたものを中心とし、それ以前のは叢書類を中心に挙げた。翻刻書のうち、室町時代物語集は「物語集」、室町時代物語大成は「物語大成」と略称した。
- ・引用本文や固有名詞などには適宜漢字をあてることがある。
- ・解題は書誌的な事項については古川千佳が担当した。梗概その他については柴田芳成、本井牧子、金光桂子が分担し、各項の最後に(S)、(M)、(K)として担当者を明らかにした。末尾の幸若舞曲は橋本正俊が担当した。

〔1〕秋月物語

附図 4-40||ア||2 <14682> 3巻（上中下）合綴1冊 刊本 刊年、版元不詳 四つ目袋綴 梅花唐草文空押藍鉄色表紙 本文料紙：楮紙 25.2×17.4cm 四周単辺 每半丁12行 柱題：秋月 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面16図 蔵書印：「福田文庫」（朱文，印主：福田敬同），「窪田文庫」（朱文，印主：窪田清音か），「中川家/蔵書印」（朱文，印主：中川忠央），「角田/家蔵」（朱文） 表紙右肩に「十八」の墨書あり 後見返に「秋月物語三巻巻冊/但下ノ十丁破也/明治二巳己年孟春十三日書?候」の墨書

大納言兼隆の娘愛敬の君は、七歳で母を失い継母を迎える。愛敬に思いを寄せる二位中将は、継母に欺かれてその実子愛子の君の婿となる。事情を知った愛子は、中将与愛敬の仲を取り持つ。継母はさらに謀略をめぐらし、愛敬を海に捨てさせる。そこへ亡母が大亀に化して現れ、愛敬を救う。愛敬は熊野下向の尼に出会い、九州秋月に伴われる。一方中将は、清水観音の導きによって秋月に辿り着き、困難を乗り越えて愛敬と再会を果たす。愛敬に思いを寄せていた大弑も、中将に従った。翌春、中将夫婦は数多の軍勢を引き連れて帰京する。やがて中将は関白、愛敬は北政所となって一門は繁栄した。秋月の尼や継母も厚遇されたという。

公家物の継子譚・恋愛譚で、王朝物語『住吉物語』とお伽草子『伏屋の物語』（〔86〕参照）を組み合わせたような筋・趣向を持つ。本書と同版の刊本は、物語集3に翻刻されている。なお、下巻10丁が破損しており、本文の一部を欠く。（K）

〔2〕秋の夜長物語

附図 4-40||ア||3 <17741> 1冊 刊本 寛永19（1642）年 [京都]安田十兵衛 四つ目袋綴 雷文地牡丹唐草空押黒柿色表紙 本文料紙：楮紙 25.8×17.5cm 四周単辺 每半丁11行 柱題：秋の夜 本文：漢字交り平仮名文，一部振仮名付 蔵書印：「田村」（黒文），「信房」（黒文）

僧侶と稚児との恋愛を描いた稚児物。後堀河院の御世、比叡山の衆徒桂海律師は、花園の大臣の子息、梅若という美しい稚児と相思相愛になる。桂海を慕って比叡山へ向かう梅若は、途中天狗に連れ去られ、幽閉される。三井寺の衆徒が桂海のしわざと誤解したことから、寺門と山門との戦いに発展し、三井寺は灰燼に帰す。龍神の助けによって逃げ出した梅若は、三井寺の焼け跡を見て自責の念から入水する。桂海は梅若の遺骨を首に懸け、西山に庵室を結ぶ。

後に新羅明神が、全ては神仏のはからいであったことを三井寺の衆徒に示し、桂海は西山の瞻西上人と呼ばれ尊崇を集めた。

数あるお伽草子の中でも秀逸な作品として評価されている。本書は先行する十一行古活字本（物語大成1に翻刻）の本文を受け継いでいると考えられている。（M）

〔3〕あさかふの露（朝顔の露）

文学部 国文学||Nr||1 <512374> 1冊 写本 天保6（1835）年 大寺平兵衛書 四つ目袋綴 後補茶色表紙 本文料紙：楮紙 27.0×20.2cm 無辺界 每半丁11行 標題は扉（元表紙）による 書題簽書名：朝顔の露 首題：あさかふの露 尾題：あさかほの露 本文：漢字交り平仮名文，一部振仮名付

桜木大王の三男露の宮はすすき御前との夫婦仲が良くなく、朝顔の上に恋する。乳母青柳の前の手引きで契りを結ぶが、朝顔は継母浮草の前によって吉野山に捨てられる。青柳から事情を聞いた露の宮は出家姿で諸国を探訪する。中将姫の化身の老女に介抱されていた朝顔であったが十八歳で没す。露の宮は熊野に参籠し、朝顔の死の夢告を受ける。吉野を訪ねた露の宮は刈萱道心に都への伝言を残して二十一歳で自害。刈萱は守り刀を大王に伝える。露の宮・朝顔の塚に若君が生まれ、その魂が蝶となる。また一門は草木と化す。

異類の継子物という趣向。写本として伝わる本作品は珍しく、刊本とは後朝の場面の描写が異なり、朝顔の詠む歌が「今宵しも千歳の契りこめぬれど人の命の明日を知らまし」となっている。また話末は「世の中は」歌のあと「此古歌をよくよく考へ菩提の道を返す返すも怠るべからず」の文言をもって閉じる。（S）

〔4〕あせち大納言（按察大納言）

文学部 国文学||Nr||2b <158328> 1冊 写本 製作地、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 格子灰赤色表紙 本文料紙：斐紙 24.8×17.4cm 無辺界 每半丁8行 内題なし、標題は後補書題簽による 本文：漢字交り平仮名文

一般に『雨やどり』の名で知られる物語の一本。按察大納言の姫君は、継母に疎まれ乳母に養育されていた。鞍馬寺で得た示現により長谷寺に参詣した帰途、雨宿りのため五条辺りの家に立ち寄る。そこで大將の息中納言に見初められた姫君は、一夜の契りで懐妊し、やがて玉のような男児を産

む。ちょうど同じ頃、時の女御も皇子を産んだが、人とも思えぬ鬼子であった。女御の乳母が姫君の乳母の姉であった縁で、姫君所生の若君が皇子として披露される。若君は東宮に立てられ、その後見として姫君も参内し、御匣殿と称される。やがて中納言と再会して北の方となり、多くの子女を儲けた。年月が経って即位した東宮は、出生の秘密を知って実父に政務を委ね、一族は繁栄を極める。すべては神仏の利生であった。

王朝恋愛物語の流れを引き、長谷・鞍馬の霊験譚に、継子物の趣向を絡めた物語である。本作品は、伝本により詞章の異同がかなりあるが、話の筋に大差はない。本書の本文は、『今宵の少将』と題する国会図書館蔵写本（『新編御伽草子』に翻刻）に近似する。（K）

〔5〕雨やとり（雨宿り）

附図 4-40ⅡアⅡ4 <30698> 上中下3冊 刊本 刊年、版元不詳 五つ目袋綴 濃紺表紙 本文料紙：楮紙 27.6×19.5cm 無辺界 每半丁10行 刷題簽書名：あまやとり 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面10図

本書は、〔6〕とは全く異種の作品で、『しぐれ』の題で知られる刊本（物語大成6に翻刻）を改題して後に出版された本である。左大臣の息中将は、清水寺で故中納言の姫君と出会い、傘を貸した縁から深く契りを結ぶ。しかし、父の命で心ならずも大将の娘に通うようになった中将は、呪詛により姫君のことを忘れてしまう。姫君は中将の心変わりを嘆き、縁故のある丹後内侍のもとに身を寄せる。参内した姫君を見初めた帝は、女御に召して寵愛する。やがて中将は呪詛の形代を発見して正気に戻り、姫君が帝の寵妃となっていることを知る。絶望した中将は、自ら髻を切り、比叡山で出家を果たす。姫君は皇子女を産み栄えたが、絶えず中将を恋しく思っていたという。

『しのびね物語』（〔44〕参照）とよく似た筋を持つ悲恋遁世譚で、散逸王朝物語『恋に身かふる』の改作かといわれている。本書を含む流布本は、最古の伝本である大東急記念文庫蔵写本（物語大成6等に翻刻）などに比して、和歌の数が半分以下という点に特徴がある。（K）

〔6〕雨やとり（雨宿り）

文学部 国文学ⅡNrⅡ2all貴重書 <333185> 上中下3冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 大和綴 金泥草木

絵濃紺表紙 本文料紙：斐紙 23.4×17.0cm 無辺界 每片面10行 内題なし、標題は書題簽による 本文：漢字交り平仮名文 蔵書印：「天野/氏藏」（朱文）、「恒久」（朱文）

〔4〕と同内容の物語。半丁分空白になっている箇所がいくつかあり、本来挿絵があるべきだったと思われる。（K）

〔7〕あめわか

文学部 国文学ⅡNrⅡ3 <121086> 1冊 刊本 刊年、版元不詳 四つ目袋綴 後補藍鼠色表紙 本文料紙：楮紙 19.4×13.6cm 四周単辺 每半丁14行 標題は柱による 後補書題簽書名：あめわか物語 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面1図、見開4図 蔵書印：「永田文庫」（朱文、印主：永田有翠） 落丁あり

神婚説話をもとにした恋愛譚で、散逸王朝物語『夢ゆゑ物思ふ』の改作とされる。本書については、勝俣隆氏による翻刻・解題がある（『新居浜工業高等専門学校紀要（人文科学編）』22、1986.3）。

時の内大臣には、二人の美貌の娘がいた。ある年の八月十五夜より、天稚御子と名乗る天人が、妹姫の枕元に現れるようになる。しかし、姫が言い付けに背いて帝の文に返歌したのを恨んで、御子の訪れは絶えた。内大臣は懷妊していた姫を勘当、代わりに入内した姉姫は帝の寵を得られず、悲嘆のあまり息絶える。玉のような若君を出産した妹姫は、父に許されて邸に戻る。若君七歳の年、天稚御子が再訪し、若君を天に連れ去ってしまう。妹姫を得られなかった帝は、讓位して出家を遂げる。妹姫は新帝の後となり、多くの皇子を産んで栄えたという。

本作品には様々な別称を持つ諸本が伝わっているが、本書の本文は、大洲市立図書館蔵刊本『あめ若さうし』や、『あめ若みこ忍び物語』と題する刊本（物語集2に翻刻）に近いとされる。ただし、落丁により一部本文と挿絵が欠脱している。なお、諸本の中には『たなばた』の名を有するものもあるが、〔55〕〔56〕とは全く別の物語である。（K）

〔8〕あろ物語（鴉鷺物語）

附図 4-40ⅡアⅡ1 <30708> 4巻4冊 刊本 慶安2（1649）年 荒木利兵衛開板 五つ目袋綴 紗綾形文地牡丹花空押紺色表紙 本文料紙：楮紙 27.5×19.1cm 無辺界 每半丁11行 首題なし、標題は刷題簽による 目録題：鴉鷺合戦物語 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮

名付 蔵書印：「大惣かし本」(黒文)

烏鷺元年九月上旬、都に稀代の合戦があった。祇園の烏東市佐林真玄は中鴨の鷺山城守正素の息女に恋し、文を遣わすが、かえって辱めを受けたことから烏・鷺の戦いとなる。烏は山野の鳥を集め、水辺の鳥を集めた鷺より数では勝ったものの、住吉・八幡の力を得た鷺に敗れ、高野山で出家する。のち鷺も出家し、ともに往生を遂げた。

室町時代の成立。『鴉鷺合戦物語』とも。本文は寛永版によるとみられる。異類合戦を描くお伽草子の中で最も長編の作品である。物語中の随所に様々な和漢の故事有職が挿話され、作者の高い学識がうかがわれるところから一条兼良や二条良基の作とみる説もある。話末に示されるごとく戦乱の世への無常観が作品に通底している。(S)

〔9〕いさよひ（十六夜）

文学部 国文学ⅡLhlⅡⅡ3 <193596>

「簡明目録」によれば奈良絵本であったらしいが、1957年3月の調査の時点で既に行方不明になっており、現在は見るできない。(M)

〔10〕いそさきうはなりのさうし（磯崎後妻の草子）

文学部 国文学Ⅱ類原文庫ⅡPbⅡ55 <1058905> 1937年 額原謙三氏写本

寛文7（1667）年刊の版本（物語集4に翻刻）を挿絵に至るまで忠実に透写したものの。(M)

〔11〕一休和尚佛鬼軍*

附図 谷村文庫Ⅱ1-26ⅡフⅡ1 <91000541> 1冊 刊本 [一休宗純著]、菱川清春画 天保5（1834）年 洛陽[京都] 著屋宗八、小川多左衛門 四つ目袋綴 素紙共表紙 本文料紙：楮紙 18.7×12.7cm 四周単辺 每半丁8行 元禄10（1697）年刻本の再板 柱題：佛鬼軍 天保5年推翁関序 澤了跋 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 挿図：片面1図、見開9図、手彩色

本作品の諸本は全て、本書の奥書にもある京都十念寺蔵の絵巻（『御伽草子絵巻』所収）が祖本となっている。この絵巻は一休自画自賛との伝承をもつものであるが、これには疑いがもたれている。現存の十念寺本は巻首が欠けているため、諸本もそれを継承するが、〔94〕はその欠けた部分に相当すると思われる記述を持っているという点で貴重である。〔94〕によって地獄側の

描写等が明らかになった。内容は地獄の冥官と仏菩薩との合戦を描いた擬軍記物。戦いの結果、地獄は浄土と化す。本書の挿絵は菱川清春の手になり、十念寺本をほぼ踏襲しているが、迫力のあるものとなっている。(M)

〔12〕いはや*（岩屋）

文学部 美学Ⅱ別置Ⅱ618 <159464> 上中下3冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 大和綴 金泥唐花草木絵 紺色表紙 本文料紙：斐紙 見返：唐草艶出し銀箔置紙 24.2×18.2cm 無境界 每片面10行 内題なし、標題は書題簽による 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面18図、見開2図、彩色（奈良絵本）

妻に死別し後妻を迎えていた堀川中納言は、太宰帥となり家族とともに筑紫へ下向する。明石の浦に停泊した夜、先妻の遺児対屋姫君は、継母の奸計によって岩の上に置き去りにされる。姫君の婚約者四位少将は、悲嘆のあまり出家する。姫君は通りがかった海人に救われ、明石の岩屋で養育されることになった。四年後、殿下の息二位中将が、湯治の帰途明石に漂着して姫君を見初め、都へ連れ帰る。中将が海人の子を寵愛していると知った母北政所は、姫君を呼び出して嘲笑しようとする。しかし姫君の美貌と教養に、北政所やその娘たちは感嘆するばかりであった。嫁として認められた姫君は、中将との間に二人の子を産む。その袴着の席で父と再会し、これまでの経緯を語り合う。一族は栄華を極め、海人夫婦も恩恵を蒙ったが、継母は狂い死にしたという。

公家物の継子譚・恋愛譚で、散逸王朝物語『いはや』の改作とされる。本作品の本文系統は多岐にわたり、人名や和歌数にも異同がある。本書は鮮やかな彩色を施した奈良絵本だが、同類の伝本の存在は未確認。なお、上巻の挿絵が一枚欠けている。(K)

〔13〕いはやのさうし（岩屋の草子）

附図 4-40ⅡⅡ2 <30710> 上下2冊 刊本 刊年、版元不詳 五つ目袋綴 濃紺表紙 本文料紙：楮紙 27.6×19.4cm 四周単辺 每半丁10行 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 挿図：片面8図

本書は〔12〕と同内容の物語で、諸本の内、流布本に位置付けられる刊本である。〔12〕に比べると、話の筋はほぼ同じだが、姫君が海に捨てられる場面の描写や結末の教訓的文辞が簡略であるなど、詞章はかな

り異なる。同版の刊本は、物語集3に翻刻されている。(K)

〔14〕魚太平記

文学部 国文学部Pb38 <198926> 1冊 刊本 刊年、版元不詳 四つ目袋綴 雷文空押丹表紙 本文料紙：楮紙 25.5×18.1cm 無境界 毎半丁8行 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 挿図：片面3図、見開5図

嘉霊二四年弥生上旬、大坂の川口で魚たちの戦が起きようとしていた。鯉山城守源味吉一行が花見の帰途、黒鯛九郎の無礼を打撃したのを発端に、鯛播磨守平骨堅が海の魚類を頼み河魚との一戦を企てる。不利とみられた河魚であったが、赤目入道円心の寝返りを得、さらに蛙の助勢も得る。越後越前の鮭へ協力要請に出た赤目が、拒否を知らせる返書を持っているところを鯛に見つかり辱めを受ける。まさに開戦に及ぼうとしたとき、鵜が文字通りの漁夫の利を説き、和平の仲介をして河海泰平となる。

尾張藩藩医小見山道休の手になると考えられる『河海物語』の改名作である。魚類の合戦（準備）を描く異類軍記物で、成立は近世。『平家物語』、『太平記』からの影響が大きく、大阪夏の陣に構想を得ているとする説もある。絵では各武将が兜にその素性を示す魚を載せて描かれている。物語大成2に同版本の翻刻あり。(S)

〔15〕御茶物かたり（御茶物語）

文学部 国文学部Pb21 <1019170>

まず延命などの茶の効用が語られたあと、四季にまつわる茶の歌があり、次いで水桶・柄杓など茶の湯の道具の歌があり、餅・ところなどの茶菓の歌がつづき、宇治茶なども歌を詠む。さいごに茶坊主と古茶との歌があり、茶の功德を繰り返して語って終わる。

茶の湯の道具、茶菓などが歌を詠むという発想は擬歌合物の一種といえる。冒頭に語りの場の設定があり、全体が鎌倉殿もてなしの物語として結構されているのだが、それに対して、話末あるいは個々の歌の列挙という内容は全体枠の構想とうまくかみあっているとはいえない。本書は寛永7(1630)年刊本（物語大成3）の写し（「簡明目録」寛文7年は誤り）だが、書写されたのは昭和に入ってから（おそらく頼原謙三氏による）であろう。(S)

〔16〕御伽文庫

附図 4-40||オ||1 <18872> 23冊 刊本 大坂 洪川清右衛門、刊年不詳 四つ目袋綴 濃紺表紙 本文料紙：楮紙 16.0×23.1cm 無境界 毎半丁13行 標題は各冊打付書外題（朱書）による 内容の書名は各冊刷題箋による、但し『さいき』の刷題箋書名：さかき 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 蔵書印：「納戸/蔵本」（朱文）

- 内容
1. 文正さうし（文正草子、挿図：片面16図）
 2. はちかつき（鉢かづき、挿図：片面11図）
 3. 小町草昏（小町草子、挿図：片面7図）
 4. 御曾子しま渡（御曹子島渡り、挿図：片面15図）
 5. からいとさうし（唐糸草子、挿図：片面11図）
 6. こわたきつね（木幡狐、挿図：片面10図）
 7. ななくさ草紙（七草草紙、挿図：片面4図）
 8. さる源氏草紙（猿源氏草紙、挿図：片面8図）
 9. ものくさ太郎（ものぐさ太郎、挿図：片面10図）
 10. さされいし（さざれ石、挿図：片面4図）
 11. 蛤の艸紙（蛤の草紙、挿図：片面11図）
 12. こあつもり（小敦盛、挿図：片面9図）
 13. 二十四孝（挿図：片面24図）
 14. ほんでん国（梵天国、挿図：片面13図）
 15. のせさるさうし（能勢猿草紙、挿図：片面7図）
 16. ねこのさうし（猫の草紙、挿図：片面7図）
 17. 濱出草紙（浜出草紙、挿図：片面5図）
 18. いつみしきふ（和泉式部、挿図：片面5図）
 19. 一寸法師（挿図：片面8図）
 20. [さいき]（佐伯、挿図：片面8図）
 21. 浦島太郎（浦島太郎、挿図：片面8図）
 22. よこ笛艸昏（横笛草紙、挿図：片面6図）
 23. しゅてん童子（酒呑童子、挿図：片面10図）

室町時代から江戸時代初期にかけて、数多くの物語草子が作られ、絵巻・奈良絵本・絵入刊本などの形で親しまれていた。江戸中期頃、書肆がその中から二十三の作品を選んで一つの叢書にまとめ、『御伽文庫』または『御伽草子』と名付けて出版した。当初は三十九冊に分冊されていたが、作品ごとに合綴して二十三冊としたものが流布したらしい。婦女子向けの教訓性を含んだ娯楽読み物として歓迎されたばかりでなく、祝言性を持ち嫁入り道具の一つでもあった。『一寸法師』『浦島太郎』のように現代まで昔話として親しまれているものをはじめ、立身出世譚、継子譚、和歌説話、遁世譚、異類譚、本地物など、多様な内容の物語が取り合わされている。狭義のお伽草子といえば『御伽文庫』所収の二十三編を指すが、これらに類する物語草子をも、後に広くお伽草子と呼ぶようになった。

全編の翻刻は、岩波文庫、日本古典文学大系、日本古典文学全集などで見られる。(K)

〔17〕花鳥風月

附図 4-40||カ||1 <14686> 上下2冊 刊本 慶安3 (1650) 年、版元不詳 五つ目袋綴 雷文地蓮華唐草丹表紙 本文料紙：楮紙 25.8×17.7cm 四周単辺 毎半丁10行 首題なし、標題は刷題箋による 柱題：花鳥 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面10図 蔵書印：「角田/家藏」(朱文)、「養間齋/蔵書記」(朱文)、「福田文庫」(朱文、印主：福田敬同)

萩原院の御時、葉室中納言の御所にて扇合が行われた。山科少将の提出した扇に描かれた男女の絵について、業平か光源氏かの議論が起こり、出羽の羽黒出身の巫女、花鳥・風月姉妹を召して占わせることになった。まず花鳥が業平の霊を呼び、風月を相手にその女性遍歴を語る。次に、扇の絵の男に似た光源氏の姿が鏡に映り、花鳥がその生涯を語る。やがて女の姿も鏡に現れ、末摘花の霊が風月に取り憑き、花鳥の源氏と問答する。末摘花は、源氏の妻妾たちへの嫉妬を綿々と述べた末、罪障を懺悔し回向を頼んで去る。続いて源氏の霊も、狂言綺語の戯れから「生死即涅槃、煩惱即菩提」の道理を悟ったと言い残して消える。もとの姿に戻った巫女姉妹は、人々の賛嘆を浴び、多くの褒美を賜って退出したという。

『伊勢物語』と『源氏物語』の内容解説を主とした作品で、中世に盛行した古注釈の影響が窺われる。本書は古活字版の系統に属する刊本で、有朋堂文庫に翻刻がある。(K)

〔18〕雁のさうし(雁の草子)

附図 4-40||カ||1別貴 <139941> 1軸 写本 慶長7 (1602) 年写、製作者、書写者不詳 卷子 梅鉢模様深緑色布表紙 本文料紙：楮紙 18.9cm 無境界 1紙およそ31行 内題なし、標題は後補書題箋による 本文：漢字交り平仮名文 白描絵巻

堀川辺のある生上達部の身よりない娘が石山観音参籠の折に、並び飛ぶ雁の姿をうらやむと狩衣姿の男が現れる。帰京後も交際は続くが、娘は夜しか通って来ない男を不審に思う。三月十日過ぎの一夜、男は来秋の再会を約して別れを告げる。翌朝軒から飛び立つ雁を見た娘は事情を悟る。ある夜、夢の中で見た雁の届けた手紙が現実であり、帰路狩人に射殺されたことを知る。

娘は乳母とともに出家、越後に草庵を結んで修行、のち往生を遂げた。

白描絵巻。絵と入れ込みに書き込まれた画中詞が登場人物たちのせりふを伝え、物語世界の内部を豊かにしている。同名作品で現存するのは本書のみ。なお書名は1940年に京都大学から複製が作成されたときに題されたものである。新日本古典文学大系『室町物語集』上には写真と共に翻刻、注釈がある。(S)

〔19〕かむ丞相(菅丞相)

文学部 国文学||Nr||6||貴重書 <121088> 1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 唐花鳳凰文表紙 本文料紙：楮紙 内題なし、標題は打付書外題による 16.7×23.4cm 無境界 毎半丁不同行 表紙、造本は『くるま僧』(国文学||Nr||7||貴重書)と同じ 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面10図、見開2図、彩色(奈良絵本)

『北野天神縁起』等で有名な菅原道真の物語。延喜の帝の御代のこと、出自は高くないが容色、才覚、芸能にともに優れた菅原の大臣という公卿がいた。大臣は時平の大臣の嫉妬により内裏放火の濡れ衣を着せられ、太宰府に流される。恨みの余り現人神^{あらひひと}となろうと祈誓し、天満天神となった大臣は、雷電となって都へと向かう。すさまじい雷電に都中の人々が恐れおののく中、時平の大臣は稲妻にうたれ、頭も骨もみじんに砕け散るという凄惨な最期を迎える。本書は大臣の師、法性房が祈祷を始めた場面以下が失われている。本書と本文的に近い彰孝館蔵『天神記』(物語集1に翻刻)によれば、この後祈祷により大臣の心が和らぎ、帝を守護する神となることが語られ、北野社の造営、御詠歌が続いていたと思われる。

本書は奈良絵本であるが、挿絵中には人名などが書き込まれており、画中詞も多い。ただし挿絵には一部本文と合わない位置に挿入されているものもある。(M)

〔20〕ぎわう(祇王)

附図 4-40||キ||1貴 <86849> 上下2冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 五つ目袋綴 布目地杉色後補表紙 本文料紙：斐紙 見返：萩松木立絵斐紙 32.2×23.3cm 無境界 毎半丁10行 標題は扉(内曇元表紙)による後補書題箋書名：妓王 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面10図、見開5図、彩色(奈良絵本)

『平家物語』に取材した作品。白拍子の祇王は平清盛の寵愛を受けていたが、仏御

前の出現によりその愛を失う。祇王は世の憂さを悟り、母とじ・妹祇女と出家し、嵯峨に遁世する。後には仏御前も加わり、四人みな極楽往生を遂げた。

本書は葉子十行本『平家物語』に近い本文である。坤巻末では、祇王ら四人の往生を語り終えたあと、弥陀本願・念仏による往生をすすめる文言が付される。(S)

〔21〕 きわう物語* (祇王物語)

文学部 国文学|Nr|4|貴重書<153942> 1冊 写本
製作年, 製作者, 書写者不詳 四つ目袋綴 薄茶色表紙
本文料紙: 斐楮混合紙 内題なし, 標題は後補書題簽に
よる 16.6×25.4cm 無辺界 毎半丁不同行 本文: 漢字
交り平仮名文 挿図: 片面6図, 彩色(奈良絵本)

内容は〔20〕に同じ。八坂流中院本『平家物語』に近い本文に依ったとみられる。(S)

〔22〕 祇園牛頭天王御縁起*

附図 平松[五]キ1 <146798> 1冊 写本 寛永11
(1634)年 製作者、書写者不詳 五つ目袋綴 素紙表紙
本文料紙：楮紙 25.9×20.0cm 無境界 毎半丁13~14行
本文：漢字交り平仮名文 奥書：「右以往昔草創之古本令
書写者也/時寛永第拾壹年歲舍甲戌辰月中澣二戌戌日」

古くから『備後国風土記』などで知られる蘇民将来の物語。豊饒国の武甕天皇の太子は七歳でその丈七尺五寸、頭に三尺の赤い角があるという姿であった。父は太子に位を譲り、牛頭天皇と名付ける。天皇が狩りをしていると一羽の鳩があらわれ、天皇の後となるべきしゃかつ龍王の三番目の娘、婆利采女のもとへ案内すると言う。眷属をひきつれて龍宮へ向かう途中、天皇は古単という長者に宿所を求めるが、慳貪な古単は許さない。一方貧しい蘇民将来は天皇を歓待し、牛玉という玉を授かる。龍宮で婆利采女と結婚し八人の皇子皇女をもうけた天皇は、帰途再び蘇民の家に宿り、古単の家には災いをなそうとする。古単は相師の占いにより千人の僧に大般若經を講読させるが、中に一人の僧が居眠りしていたために結局天皇の眷属に一族もろとも殺されてしまう。

本書は真名本（物語大成3に翻刻）をそのまま訓み下したような本文になっているが、一部独自の本文ももっている。（M）

〔23〕 祇園御本地

附図 4-40||キ||5 <332959> 3巻1冊 刊本 刊年、版

元不詳 四つ目袋綴 薄茶色表紙 本文料紙：楮紙
25.8×18.4cm 四周単辺 每半丁10行 柱題：きをんの御
本地 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面1図，見開23
図 落丁あり

物語大成3所収の天理図書館蔵刊本と同版と思われるが、落丁が多く、綴じる順番も大幅に入れ替えてある。序文の次に天理図書館蔵本の巻四にあたる部分を挿入し、その後には挿絵を全てまとめてある。〔22〕と同内容の蘇民の物語も語られるが、中心は祇園の祭礼の絵の方にある。(M)

〔24〕衣更着物語

附図 4-40|キ|1 <17739> 上下2冊 刊本 元禄6
(1693) 年 [京都] 永田調兵衛開板 五つ目袋綴 紺色表
紙 本文料紙：楮紙 27.2×18.8cm 四周单辺 每半丁10
行 首題なし、標題は柱による 下冊刷題簽書名：新板
衣更着物語名君の繪あらそひ：繪入 上冊見返題：きさ
らぎ（墨書） 下冊見返に刷題簽貼付：「二月物かたり：
名君の絵あらそひ」 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮
名付 挿図：片面1図、見開18図 蔵書印：「角田/家藏」
（朱文）、「福田文庫」（朱文、印主：福田敬同）、「田村」
（黒文）

二月中旬、所在ない春雨の頃、御室の御所にて十二番の扇合が行われた。四季の風物を描いた扇が、左右から次々と繰り出される。人々は、その絵がいずれの古歌を踏まえたものかを当て合い、興じていた。十二番の勝負が終わる頃、どこからともなく不思議な童女が現れ、男女の絵を描いた扇を差し出して姿を消した。その絵が業平か光源氏か、左右に分かれて論争となる。占いで決着をつけるため、東国出身の巫女、山路・白菊姉妹が召された。姉妹は業平・光源氏・末摘花の霊を呼び、その述懐を代弁する。絵の男女は源氏と末摘花で、罪障を懺悔して立ち去った。巫女姉妹は褒美を賜って退出した。

本作品の下巻は〔17〕と同内容で、表現も似るところが多い。(K)

〔25〕 きふね* (貴船)

総合人間学部 413|48||貴重書 <三高56549> 上中下3冊 写本 製作年, 製作者, 書写者不詳 四つ目袋綴 金泥草花模様紺色表紙 本文料紙: 斐紙 16.7×24.2cm 針穴による天地界 毎半丁14行 本文: 漢字交り平仮名文 挿図: 片面14図, 彩色(奈良絵本) 蔵書印: 「第三高/等學校/圖書印」

寛平の頃、定平の中将は都中の姫君を次々妻に迎えながら、心から愛する姫君に

巡り会えないことを嘆いていたが、法皇の御前で行われた扇比べの席で、扇に描かれた女房の絵姿に心奪われる。扇の持ち主の伯父に、鬼国の大王の娘、こつによが扇の女房よりも美しいと聞いた中將は、鞍馬の毘沙門天の示現によりこつによと結ばれる。共に鬼国へ趣いた二人は、こつによの父の大王の怒りに触れ、どちらか一人を生け贄に差し出すように申しつけられる。こつによは自分が身代わりになることを申し出、後世を弔ってほしいと願い、生け贄にされる。中將が悲しみに沈みながらもこつによの菩提を弔うと、その功德でこつによは中將の伯母の娘に転生し、二人は再び結ばれる。そのことを知った父王が二人を殺そうと日本へやってこようとするが、毘沙門天の示現による五節句の行事のために近づくことができなかった。中將と姫君は貴船の神となって衆生を済度した。

本作品には奈良絵本も多く残存しているが、本書も繊細な挿絵の入った奈良絵本である。保存状態も良好で、非常に美しい本である。(M)

〔26〕きふねの本地（貴船の本地）

附図 4-40||キ||2 <30706> 上中下3冊 刊本 刊年、版元不詳 五つ目袋綴 雷文地蓮華唐草空押紺色表紙 本文料紙：楮紙 26.5×17.4cm 四周単辺 每半丁10行 下巻刷題簽書名：木船の本地 柱題：きふね 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面3図、見開6図、彩色（丹緑本） 表紙に「全部三冊」の墨書貼紙

〔25〕と同内容の物語。本書と同版の慶應義塾図書館蔵本が物語大成4に翻刻されている。(M)

〔27〕くま野（熊野）

文学部 国文学||Nr||5||貴重書 <332166> 1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 内曇木立絵煙草色表紙 本文料紙：斐紙 内題なし、標題は書題簽による 18.0×24.0cm 無辺界 每半丁14行 本文：漢字交り平仮名文

本地物の中でも最も有名な作品のひとつ。絵巻や写本、刊本など諸本の多いことでも知られている。本書は杭全神社蔵の絵巻（物語集1に翻刻）を書写したものと考えられており、わずかな脱文などを除けばほぼ共通した本文となっている。

観音に祈願して天竺摩訶陀国の善財王の待望の王子を身ごもった五衰殿の妃は、他の九百九十九人の妃たちの嫉妬により、山

中で首を伐られることになる。妃の死の直前に産み落とされた王子は母の亡骸の乳房とけだものたちに育てられるが、三歳の時、ちけん上人という聖に具せられて山を下りる。七歳になった王子は父大王に対面し、母の死のいきさつを語り、国王が譲位を望んでいるのにも関わらず、母の菩提を弔うために釈迦の弟子になることを望む。上人の祈祷により母妃が蘇生すると、国王と妃と王子は安住の地を求めて日本へ渡り、熊野の神々となる。熊野修験との深い関係が窺われる。(M)

〔28〕くるま僧（車僧）

文学部 国文学||Nr||7||貴重書 <332167> 1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 唐花鳳凰文表紙 本文料紙：楮紙 内題なし、標題は打付書外題による 16.6×24.4cm 無辺界 每半丁15行 表紙、造本は『かむ丞相』（国文学||Nr||6||貴重書）と同じ 『たまも』（国文学||Nr||20||貴重書）と同筆 本文：漢字交り平仮名文 印記：「豊」（黒文）

主人公は花のさかりに見初めた美しい女房と恋に落ち、自分の屋敷に迎える。しかし主人公の両親は女房の出自の低さから反対し、主人公が清水に参籠中に、北野参詣と偽って女房を連れだし殺害させる。主人公は洛中洛外を探し歩いて三年目、天神に参詣し通夜している女房と老僧にめぐりあう。女房は主人公と一夜をともにした後、自らの最期を語る。老僧は女房の遺骨のある場所へ主人公を案内すると姿を消した。全ては自分を発心させようとの観音、天神のはからいであったと悟った主人公は小さな車に乗り、念仏を唱えながら洛中を巡ったという発心遁世譚。〔29〕はこの後日譚ということになる。

〔29〕とともに京都大学より1941年に翻刻が出版されている。本書は御巫清白氏旧蔵本（物語大成4に翻刻）とほぼ共通した本文をもっている。異本に東洋大学蔵絵巻『松姫物語』がある。(M)

〔29〕車僧ノ巻物

附図 4-40||ク||2別貴 <141034> 1軸 写本 製作年、製作者、書写者不詳 卷子 雲母引白色表紙 本文料紙：斐又は斐楮混合紙 27.0cm 無辺界 1紙不同行 内題なし、標題は書題簽による 本文：漢字交り平仮名文 彩色絵巻（奈良絵本）

世阿弥作といわれる謡曲『車僧』に取材した一編。小さな車を宿とする禅僧、車僧

がある雪の日に嵯峨野に車を立てて四方の景色を眺めていると、愛宕山の太郎坊という天狗が車僧をたぶらかそうと問答を仕掛けてくる。正体を見破られて一度は退散するが、十二天狗を語らって再び現れ、修羅道や地獄の有様を現出させるなど様々な験力をあらわしてみせる。しかし車僧の悪魔降伏の呪により不動をはじめとする神仏が現れ、天狗達を車僧の前に引き据え、以後このような災いをなさないという誓いを立てさせる。天狗達は車僧を拜んで愛宕山へ帰っていく。

本作品は京都大学所蔵の一本しか知られていない。1941年に京都大学から藤井乙男氏による解説、翻刻付きの複製が刊行されている。物語大成4、『室町ごろ』にも翻刻あり。(M)

〔30〕恋つか物語（恋塚物語）

文学部 国文学ⅡPbⅡ19 <495283> 2巻（上下）1冊
刊本 刊年、版元不詳 四つ目袋綴 渋引深緋色表紙 本文料紙：楮紙 24.2×17.3cm 四周単辺 每半丁11行 柱題：恋つか 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付挿図：片面10図 蔵書印：「竹冷挿架」（朱文、印主：角田竹冷）

近衛院の御代、橋供養の奉行として難波に下った遠藤滝口盛遠は、舟で聴聞にやって来た、刑部左衛門重元の妻天女の姫を見初める。天女の母に奉公した盛遠は、その手引きで天女に会い、夫と別れるよう説得する。孝行と貞操との板挟みになった天女は、盛遠に重元を殺害するよう頼み、自ら夫の身代わりとなって討たれる。過ちを知った盛遠は出家して文覚と名乗り、平家を祈祷で滅ぼしたという。重元も出家して俊乗坊重源となり、後に大仏殿を再興した。盛遠が天女の首を捨てた所が、今の鳥羽の恋塚である。

読み本系『平家物語』に見える、文覚の発心譚に依拠した作品。本書と同版の刊本は、物語大成4に翻刻されている。なお、上巻6丁表の挿絵は汚損甚だしく、新たに挿絵を描いた一葉が挿入されている。(K)

〔31〕かうろき虫三十六歌仙（蟋蟀虫三十六歌仙）

文学部 国文学Ⅱ類原文庫ⅡJclⅡ8Ⅱ貴重書 <879504> 1冊
写本 製作年、製作者、書写者不詳 紙捻仮袋綴 素紙共表紙 本文料紙：楮紙 24.1×16.8cm 無辺界 每半丁10行 打付書外題：かうろき物語虫三十六歌仙、おし

え艸 本文：漢字交り平仮名文 『おしえ艸』の後に合綴される

虫による歌合物。別名『こほろぎ物語』。「簡明目録」が『虫の歌合』とするのは誤り。ある秋の末の夕暮れ、庭の草むらから虫たちの交わす声が聞こえてきた。コオロギの提案で、ハタオリムシ、スズムシ、カゲロウなどの虫たちがそれぞれの名を歌に詠む。判者をつとめた蛙が、明け方も近いので解散をすすめたところ、イモリが怒りを歌に託すが、蛙も歌で応酬した。コオロギがそれを鎮めてみな藪に帰った。

歌数三十三。内閣文庫本（物語大成5）と比較すると登場する虫の順が相違する。さらに「かまきり」「百足」がなく「たはら虫」が加わり、「くつはむし」の上句と「日暮」の下句を合わせて「日ぐらし」の歌とするほか、「飛むし」を「はね虫」とし、「蛭」では歌が異なる。また蛙の名は「藤原しぶつら」となっている。虫の歌を列挙したあとで「昔三十六歌仙をまなびて」とあるなど本文は全体に黒川本に近い。(S)

〔32〕御すいてん（五衰殿）

附図 4-40ⅡコⅡ3 <1068901> 上下2冊 刊本 寛文8年、版元不詳 四つ目袋綴 雷文地蓮華菊花文空押濃紺表紙 本文料紙：楮紙 27.3×18.6cm 四周単辺 每半丁16行 柱題：こすい 本文：漢字交り平仮名文 挿図：見開6図

〔27〕と同内容の物語。丹緑本『くまののほんち』（物語集1）と同文である。上巻は丁付けは通っているが、本文的には8丁と10丁が入れ替わっている。(M)

〔33〕西行繪詞

文学部 国文学ⅡNsⅡ5 <106406> 1冊 写本 寛永庚辰（1640）年 製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 紺色表紙 本文料紙：斐楮混合紙 27.8×19.8cm 無辺界 每半丁9行 本文：漢字交り平仮名文 蔵書印：「法蔵寺」

出家の志深く、和歌に秀でた佐藤兵衛義清が、友人の死に触発され、恩愛の妻子を振りきって出家し西行と名乗り、諸国を巡った後、往生を遂げるまでを描く。最愛の娘を縁から蹴落として出家する有名なエピソードなども含まれており、西行像の形成に果たした役割は大きいと思われる。本作品は絵巻、写本、奈良絵本、刊本など、諸本が多く残っており、本書にも「しかじかの絵有り」といったように、絵があったこ

とを示す文が挿入されていることから、絵入りの本を写したことが窺われる。本文的には神宮文庫蔵本（物語大成5に翻刻）に近い。（M）

〔34〕西行四季物語

附図 4-40||サ||1 <30727> 春夏秋冬2冊 刊本 寶永5（1628）年〔京都〕河南四郎右衛門板 四つ目袋綴 生成地薄茶色格子文表紙 本文料紙：楮紙 22.5×15.8cm 四周単辺 毎半丁9行 刷題篆書名：絵入/西行四季物語 柱題：西行 本文：漢字交り平仮名文、一部平仮名付 挿図：片面13図、見開1図 蔵書印：「竹林庵蔵」（黒文）、「長嶋町五丁目/大野屋惣八」（黒文、印主：大野屋惣八）表紙に「れ式百式十式/全式」の墨書貼紙あり

〔33〕と同内容の物語だが、本文の系統は異なり、現在行方不明の明応9（1500）年、海田采女筆絵巻を復刻したものだという。（M）

〔35〕西行物語

附図 4-30||サ||3貴 <86830> 4巻4冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 内曇表紙 本文料紙：斐楮混合紙 見返：金銀切箔置紙 17.0×24.4cm 針穴による天地界 毎半丁13行 標題は書題簽及び第2巻以降の首題による 第1巻首題：さいきやう物語 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面26図、彩色（奈良絵本）

これも〔33〕、〔34〕と同内容の奈良絵本であるが、本文は〔36〕の正保3（1646）年刊本とほぼ一致する。（M）

〔36〕西行物語

附図 4-30||サ||1 <30701> 上中下2冊 刊本 正保3（1646）年 木村次郎兵衛刊行 五つ目袋綴 紗綾形文地牡丹花空押丹表紙 本文料紙：楮紙 27.8×18.4cm 無境界 毎半丁11行 首題なし、標題は刷題簽による 柱題：西行 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 表紙に「ふ五百六拾四」の貼紙あり

本書と同版の赤木文庫蔵本が物語大成5に翻刻されている。（M）

〔37〕さごろも（狭衣）

文学部 国文学||Nrl||10 <222836> 上下1冊 刊本 松會開板、刊年不詳 五つ目袋綴 秋草文紺色表紙 本文料紙：楮紙 27.1×18.6cm 四周単辺 毎半丁15行 打付書外題及び柱題：さごろも 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 挿図：片面9図 蔵書印：「南里/家印」落丁あり

平安後期成立の『狭衣物語』の中から、飛鳥井姫君にまつわる物語を取り上げ、幸福な結末に仕立て直した一編。本作品には

多数の伝本が知られており、内容の異同もかなり大きい。本書は「昔欽明天皇の御時」で始まる諸本の系統に属する。

内大臣の息狭衣中将は、師中納言の娘飛鳥井姫君を誘拐から救い、秘かに通い始める。それを知らぬ姫君の両親は、狭衣の乳母子兵部大輔の求婚を受け入れる。兵部大輔の任地筑紫へ伴われる途中、海に身を投げんとした姫君を助けたのは、偶然行き会った兄の僧だった。帰京した姫君は、洛西常盤にて狭衣の子を出産する。一方、国々を巡り姫君を探していた狭衣は、やはり狭衣の行方を求めていた兄僧と、奈良の大仏の前で邂逅する。そこへ姫君急死の知らせが入る。嘆き悲しむ狭衣と若君が墓を掘り起こさせると、その祈りに応じて姫君は蘇生する。一同晴れて都に戻った後、若君は帝位を譲られ、狭衣は大臣となり、姫君は北政所と呼ばれることになった。（K）

〔38〕さころもの記（狭衣の記）

附図 4-40||サ||2 <30811> 1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 五つ目袋綴 雷文空押紺色表紙 本文料紙：楮紙 26.4×19.6cm 無境界 毎半丁10行 内題なし、標題は書題簽による 本文：漢字交り平仮名文 表紙に「言」の墨書貼紙あり

〔37〕と同系統の本文を持つ。挿絵はないが、行の途中で改行したり、一・二行分空ける箇所がいくつかあり、それらは全て、同系統に属する赤木文庫蔵丹緑本（物語大成6に翻刻）の挿絵の位置と一致している。絵入本を書写したものであろう。（K）

〔39〕さよひめ（小夜姫）

文学部 美学||別置||617 <159463> 上中下3冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 大和綴 金泥秋草絵紺色表紙 本文料紙：斐紙 見返：唐草艶出し銀箔置紙 24.0×18.4cm 無境界 毎片面10行 内題なし、標題は書題簽による 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面18図、彩色（奈良絵本）

大和国壺坂の松浦長者は観音より申し子小夜姫を授かるが、小夜姫四歳の時、亡くなってしまう。母と二人残された小夜姫は、十六歳の時父の十三回忌の追善を営むために奥陸奥国のこんかの太夫に自らの身を売る。しかしそれは大蛇の生け贄となる娘の身代わりであった。法事を盛大に営んだ後、母との別れを惜しみながら奥州へと旅立つ。中巻はこの母との別れと奥州への道行の部分がかなりの分量を占めており、語り

物の口吻を窺わせるような七五調の文章になっている。小夜姫が生け贄として差し出されると、池から大蛇が現れるが、小夜姫が法華經を読むと美しい女房となる。女房は法華經の功德で得道したことを述べ、小夜姫に如意宝珠を授ける。小夜姫は大蛇に送られてふるさとに戻り、母と再会し、如意宝珠から宝を降らせて再び長者として栄える。小夜姫は竹生島の弁財天として現れたという本地物となっている。物語集4に翻刻。(M)

〔40〕さるげんじ(猿源氏)

附図 4-40||サ||2貴<14599> 2冊 刊本 刊年、版元不詳 四つ目袋綴 紗綾形空押藍色表紙 本文料紙：楮紙 23.8×17.5cm 無辺界 毎半丁10行 後補書題簽書名：猿源氏 柱題：さる 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面8図 蔵書印：「磯廼/屋印」(朱文、印主：生川正香か)、「中井/蔵書」(朱文、印主：中井浩水)

伊勢阿漕が浦の鰯売り猿源氏が、遊君螢火に一目惚れし、舅の南阿弥陀仏の協力を得て宇都宮弾正に扮し、思いを遂げる。寝言に鰯行商の文句を言ったことから、実は鰯売りと呼ばれるが、寝言の文句に対する螢火の質問に猿源氏は様々の和歌故事を引いて言い訳する。それからはともに阿漕が浦に暮らし、富貴・子孫繁盛したという、和歌の才を称揚する物語。

『御伽文庫』二十三編の一つ、「猿源氏草子」。物語大成6等に翻刻。(S)

〔41〕三人ぼうし(三人法師)

文学部 国文学||Nr||11 <120018> 上下1冊 刊本 [江戸](大傳馬三丁目) 擦切れのため刊年、版元不詳 四つ目袋綴 雷文空押丹表紙 本文料紙：楮紙 26.8×18.0cm 四周単辺 毎半丁16行 書題簽書名及び柱題：三人ぼうし 本文：漢字交り平仮名文 挿図：見開4図 落丁あり

「簡明目錄」には「〔元禄〕鱗形屋刊絵入中本二卷(京大國文)」とあるが本書の刊記部分は破損しているため、判読できない。

高野山で半出家の三人の僧が懺悔物語をすることになった。初めの僧はもと糟屋四郎左衛門といったが、尾上という女房と恋に落ち結ばれる。しかし糟屋が北野天神に参籠中、尾上は殺されてしまう。その夜のうちに糟屋は尾上の菩提をとむおうと髪を下ろす。次に語り出した僧は尾上を殺したのは自分であると告げる。僧はもと三条の荒五郎という盗賊だったが、妻に言われて

盗みに出かけ、美しい女房を殺して衣装を奪った。喜んだ妻は女房の死骸もとへ行き、鬘にしようと髪を切ってくる。荒五郎はその浅ましさに発心したのだという。もう一人は楠の一族、篠崎六郎左衛門といったが主君が足利へ降参したのを契機に出家する。故郷に帰ってみると、幼い子供を残して妻が他界したところであった。子供たちは父とも知らず供養を頼み、篠崎は父と名乗りたい気持ちをおさえ、子供たちが母の遺骨を持って法会に詣で、上人に供養を頼むのを見て、恩愛を振り切って高野山へ登る。三人の法名は玄梅、玄松、玄竹であることがわかり、その奇縁を喜んだ。『沙石集』や『吉野拾遺』などとの関係が指摘されている。(M)

〔42〕しほやきぶんしやう(塩焼き文正)

附図 4-40||シ||2別貴<51426> 上中下3冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 五つ目袋綴 内墨表紙 本文料紙：斐紙 30.0×21.8cm 無辺界 毎半丁10行 内題なし、標題は中巻の打付書外題による 上巻打付書外題：シホヤキブンシヤウ 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面32図、見開7図、彩色(奈良絵本)

『文正草子』の通称で知られ、『御伽文庫』の巻頭を飾る物語の一本。極めて華麗な彩色の施された大型の奈良絵本で、物語集5に翻刻されている。

常陸国鹿島大明神の大宮司に仕える雑色文太は、製塩業で巨富を得て、文正つねおかと呼ばれる。大明神に祈願して授かった二人の娘は気位が高く、大宮司の息子や国司の求婚も受け付けない。都の殿下の息二位中將が姉妹の噂を聞きつけ、見ぬ恋に苦しむ。中將は小間物売りの姿で常陸に下り、巧みな口上や管絃で文正親子を惹き付け、姉娘と契りを結ぶ。身分を明かした中將が姉娘を伴って帰京した後、帝の召しによって、妹娘も父母と共に上京する。やがて中將は関白に任ぜられ、姉娘は北政所、妹娘は后となり、それぞれ子女を産んで末永く栄えた。文正も高官に任じられ、栄華の内に長寿を保ったという。

貧しい庶民が、身の才と娘の徳により立身出世を果たすという祝儀物。その内容のめでたさゆえに、女子の正月の読み物にふさわしく、嫁入り道具にも加えられ、豪華な奈良絵本や絵巻物が多数作られた。従って伝本の数も多く、本文の異同は大きい、話の筋はほとんど同じである。(K)

〔43〕〔四十二の物あらそひ〕*（四十二の物争い）

附図 4-40||シ||1貴別 <975910> 1軸 写本 製作年、製作者、書写者不詳 卷子 花菱模様千草色後補布表紙 本文料紙：斐紙 34.0cm 無辺界 内外題なし 本文：漢字交り平仮名文 彩色絵巻（奈良絵本） 前半を欠く

四十二首の和歌を中心に構成される擬歌合物。本作品には絵巻・奈良絵本・刊本の類が多数存在し、各々歌の配列や本文に少しずつ異同がある。本書は前半を欠き、後半二十二首のみを有する。歌の順序は、最古の伝本とされる赤木文庫蔵室町後期写本（物語大成6に翻刻）に、一首を除いて一致し、古態を保つものと思われる。本文も同写本に比較的近いが、詠者の名を欠くことが多い。歌仙絵風の詠者の像やそれぞれの歌の主題を絵画化し、その余白に本文を散らし書きしている。

以下、前半部を他本により補って梗概を記す。奈良の帝の御時、二月の花盛りに、帝は東宮の御所に赴いて、春秋の優劣を尋ねる。それをきっかけに、鶯と時鳥、暁の恋と夕の思いなど、二つのものの優劣を歌で定める、四十二番の物争いが始まった。帝・東宮をはじめとして、廷臣・女房たちが次々と詠じてゆき、やがて院や女院も参加して、座はいよいよ盛り上がる。物争いが終わった後も、酒宴・管絃が夜明けまで続いた。（K）

〔44〕しのひね物語（忍音物語）

文学部 国文学||Nr||16 <85369> 1冊 写本 文政9（1826）年 光棧 四つ目袋綴 後補紫色表紙 本文料紙：楮紙 27.1×20.2cm 無辺界 每半丁9行 首題なし、標題は扉（元表紙）による 本文：漢字交り平仮名文 書写奥書：「此一冊借江府和学講談/所本令書写/文政九年 五月十六日光棧」

平安末までに成立していた同名の物語を、中世に改作したものとされる。内大臣の息公経は、嵯峨野で垣間見た故中務卿宮の姫君と結ばれる。二人の間には男児も生まれたが、内大臣は公経に左大将の娘との結婚を命じ、若君を手元に引き取る。左大将の婿となったものの気の進まぬ公経の様子を見て、内大臣は姫君を追い出そうとする。姫君は母の知人である内裏の典侍の局に身を寄せ、その美貌を垣間見た帝に言い寄られるが、忍び音に泣き沈むばかりであった。公経は、姫君が帝のもとにあることを知って絶望し、出家を決意する。別れを

告げるため秘かに姫君を訪れた公経は、縋る姫君を欺いて横川へ赴き、剃髪して勤行生活に入った。その後姫君は帝の寵を受けて女御・中宮となり、所生の皇子は即位に至る。成人した若君は父を慕って横川を訪れ、対面を果たしたという。

親の妨害などによる悲恋の末、貴公子が出家遁世し姫君は栄達を遂げるという、王朝物語で愛好された話型の典型例である。本作品の諸本は本文の異同によって三系統に分けられており、本書は第一系統に属する。「簡明目録」が第二系統に分類するのは誤りであろう。（K）

〔45〕しやかの御本地（釈迦の御本地）

文学部 国文学||Nr||18 <128676> 上中下3冊 刊本 [江戸] 本問屋[喜右衛門]開版、刊年不詳 四つ目（上）、五つ目（中・下）袋綴 雷文地鳳凰文空押濃紺表紙 本文料紙：楮紙 27.0×19.0cm 四周単辺 每半丁14行 上巻刷題簽書名：繪入しやかの御本地 中巻首題：しやかの御はんち 柱題：しやか 上巻裏表紙、中・下巻表紙剥落 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 挿図：片面7図、見開5図

「本地」というタイトルがついているが、内容は釈迦の本生譚ではなく釈迦の伝記。釈迦の出生から涅槃、阿難による経典結集までが描かれる。経典などに説かれるものとは異なる内容のものもあり、特に亡母摩耶夫人への思慕や妻耶輸陀羅との別離、息子羅睺羅との対面などの肉親の情愛にみちた場面には多く筆がさかれている。本文的には〔46〕をほぼ踏襲している。（M）

〔46〕釈迦の本地

附図 4-40||シ||10 <190658> 上中下合綴1冊 刊本 寛永20（1643）年 [京都] 橋屋源兵衛開板 四つ目袋綴 素紙表紙 本文料紙：楮紙 28.0×17.8cm 四周単辺 每半丁11行 打付書外題：釋迦一代記 柱題：釈迦本地 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 蔵書印：「妙庵」（朱文）

〔45〕と同内容の物語。同版の赤木文庫蔵本が物語大成7に翻刻されている。（M）

〔47〕酒茶論*

文学部 国文学||類原文庫||Pb||78 <1028825>

異類軍記物。壺の口切の会の折、上戸と下戸が口論したことを発端に酒と茶の戦となる。酒軍は大和国もろはくを大将とし、宇治の極上を大将とする茶軍が陣取る平等院に向かう。木の実、茶請けが茶軍に援軍

し、宇治川の戦いが始まるが、魚類・鳥類の仲介で和平となる。

本文中、茶の湯の作法次第、酒の徳、故事などがふんだんに挿話される。本書は頼原謙三氏による寛永頃刊本（物語大成7）の写本（1942年写）である。なお、『酒茶論』と題する作品には酒飲みと茶好きの優劣口論を描く別系統の作品もある。（S）

〔48〕酒飯論繪寫

文学部 美学Ⅱ別置Ⅱ449 <152736>

まず上戸が様々な故事を引きつつ酒飲みの徳を述べ、「南無阿弥陀仏」と唱えて歌を詠む。次いで下戸が飲酒の不始末ともしばら食べることの良さを言い、「南無妙法蓮華経」と唱えて歌を詠む。最後に中戸が何事においても中庸が良いことを述べ、「南無三宝」と唱えて歌を詠む。

三者三様に己が立場の良いことを故事因縁を引用して論争する形式。同時にそれぞれを浄土・法華・天台の立場にもじっている。極書によれば、本書は田中尚房の旧蔵にかかり、絵は狩野派の手になる底本を高山青嶂が模写したものである。（S）

〔49〕しやうるり（浄瑠璃）

附図 4-28ⅡシⅡ2 <17746> 上中下合綴1冊 刊本 正保3（1646）年 [京都] 杉田勘兵衛尉開板 五つ目袋綴 練色表紙 本文料紙：楮紙 25.3×17.6cm 無辺界 每半丁11行 後補書題簽書名：浄瑠璃十二段 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面12図 蔵書印：「田邨」（朱文），「篁坡/清賞」（朱文） 題簽に「湯島文庫珍藏」の朱書，後見返に「此物かたりは小野の通女か/書たるよし塩尻に見え/たり/持主/富田昌阿」の墨書あり

『浄瑠璃物語』ともいわれる判官物の一種。貴公子としての御曹司義経と薬師の申し子浄瑠璃御前の恋を描く。御前は三河国司源中納言兼高と矢作の遊君長者との間に薬師の申し子として誕生する。弥生半ば、金売吉次に連れられ奥州へ下る御曹司が琴の音と屋敷の風情にひかれて御前を垣間見、自身も横笛を奏す。共に管弦に遊び、一度は宿に帰った御曹司だが、御前への思いが募り、夜分寝所へ推参、枕問答を交わして契りを結ぶ。のち御曹司は吉次と奥州へ旅立つが吹上にて病に伏し一人残される。八幡のお告げを得た御前が着いたとき、すでに御曹司は息絶えていたが、御前の涙、神仏への祈誓によって蘇生する。御曹司は御前に正体を明かし、再会を誓って奥州へ

下る。

本書は整版本としては最も古いものである。第一・十二段は段名を欠く。行文は東京大学蔵古活字版にほぼ等しいが、「浄瑠璃枕問答」の段以降、各段末に増補部分が見られる。吹上浜の場面では御曹司の蘇生と山伏の登場が前後し、御前が天狗に乗って矢作へ戻るとするなどの相違がある。（S）

〔50〕諸虫太平記*

文学部 国文学ⅡPbⅡ53 <128671> 上下1冊 刊本 刊年、版元不詳 四つ目袋綴 練色表紙 本文料紙：楮紙 22.3×16.0cm 四周単辺 每半丁10行 首題なし、標題は刷題簽による 本文：漢字交り平仮名文，一部振仮名付 挿図：片面6図，一部彩色

『虫太平記』の改題作品。松虫が鈴虫に語った近頃の戦の次第はこうであった。蜘蛛悪太郎足数の巢にかかり息子を失った蟬六郎音高は、同じく息子を殺された蜻蛉牛之介とともに蜘蛛を討つことを申し入れる。廻文によって蟻螂らの諸虫に援軍を募り、蟬を大将に蜘蛛ケ巢城に向かう。源五郎ら水辺の虫をも味方に加えた諸虫軍は蜘蛛ケ巢城を攻める。途中やんまが拔駆を図ったことから負傷者が増えたが、蜂・蟻螂の活躍、熊蜂の助勢もあって諸虫軍が蜘蛛ケ巢城を破る。蜘蛛軍は評定の結果降参を選ぶ。諸虫万歳を唱えてそれぞれの住家に帰った。

物語大成7に同版の翻刻。同書解説によれば近世に入ってから成立であるという。（S）

〔51〕白ぎくさうし（白菊草子）

附図 4-30ⅡシⅡ7 <75850> 1冊 写本 製作地、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 濃紺表紙 本文料紙：楮紙 28.4×19.0cm 無辺界 每半丁9行 首題なし、標題は扉による 本文：漢字交り平仮名文 蔵書印：「藤岡蔵書」（朱文）

本書は、一般に『一本菊』の名で知られる作品の一本で、諸本の中では最も特色のある異本といえる。話の大筋は、〔87〕に記した梗概と大差ないが、文章は概してより詳細で、叙述の順序が入れ替わっている部分もある。また、秘かに薩摩へ下る侍従内侍が入水を装ったため、その両親が悲嘆する場面など、独自の趣向も見られる。物語集3に翻刻がある。（K）

〔52〕諏訪縁起物語

附図 4-40ⅡスⅡ2 <30139> 1冊 写本 寛永2 (1625)
年写 大和綴 素紙表紙 本文料紙：楮斐混合紙 26.6×
18.5cm 無辺界 每片面10行 標題は書題簽による 首
題：敬白すはのゑんきの事 本文：漢字交り平仮名文、
朱後筆の振仮名付 奥書：「寛永二年二月十九日写之」
(本文末)

『諏訪の本地』として知られる物語。本作品には大きく分けて二つの系統があり、主人公の名前により兼家系、諏方系と呼ばれるが、本書は主人公の名を諏方とすることから後者に分類されている。

近江国甲賀の権守には三人の息子がいたが、三郎諏方に家督を譲り亡くなる。三郎は春日姫を妻にするが、巻狩りの時に魔王に奪われる。春日社に参籠して不食飽満という玉を授かった三郎は、日本中を探し回り、信濃国蓼科の人穴で姫をみつける。玉の力で無事姫を助け出した三郎だが、兄二郎の奸計により穴の中に取り残されてしまう。三郎は穴の中を遍歴し、様々な国を通った後で維縵国に至り、長者の娘、維縵姫と結ばれ、九年六月を過ごす。春日姫が恋しくなった三郎は長者と維縵姫に暇乞いをし、長者に教えられた通り難所をぬけて故郷へ帰り着く。しかしそこではすでに三百余年が経っており、しかも三郎は自分が蛇の姿をしていることに気付く。釈迦堂での僧たちの物語から蛇体を脱する方法を授かるが、僧達は伊勢を初めとする神々であった。大原の大明神の導きで春日姫と再会した三郎は、夫婦共に唐天竺へ渡るが、三年後伊勢からの使いに呼び戻され、諏訪明神となってあらわれた。末尾には神となった後日譚が付けられている。物語集2に翻刻。(M)

〔53〕是害房繪

文学部 国文学ⅡNsⅡ8Ⅱ貴重書 <102949>

曼殊院蔵の絵巻(新修絵巻物全集に写真、翻刻)を1910年11月臨模したもの。字体、改行、絵、画中詞にいたるまではほぼ忠実に写しており、原本の雰囲気をよく伝えるものであるが、絵については最後の是害房との別れの宴の場面だけが無い。

村上天皇の御世、唐からは害房という大天狗の首長が日本へやってくる。愛宕護山の日羅房という天狗に先達を頼み、余慶律師、尋禅僧正、慈恵大師などに験くらべを挑むが、いずれも散々な目にあわされる。

湯治により回復した是害房は日羅房たちと歌を詠み交わし、本国へと帰っていく。画中詞が多く、ユーモラスな雰囲気が生き生きと描かれている。(M)

〔54〕草木太平記

附図 4-40ⅡソⅡ2 <30697> 2巻(上下) 合綴1冊 刊本
古藤七郎兵衛、刊年不詳 四つ目袋綴 薄茶色表紙 本文料紙：楮紙 26.1×19.2cm 四周単辺 每半丁15行 刷題簽書名：草木大平記 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面13図 蔵書印：「大」(黒文、印主：大野屋惣八)

草木元年、不思議な戦があった。大和国吉野里の八重桜を古薄が見初め、ついには契りを交わした。それを聞いた梅が怒り、戦を思い立つ。薄が武蔵野に下って草軍を催すところに藻塩草らが加勢する。一方梅は吉野にて花木軍を興す。茶木はわびに専念するため両軍に属さず、京蔭は合戦見物をする。鴨川で合戦が始まり、さつきの二心などもあって草軍が優勢に進め、花木軍は鞍馬に退却するが楠木の出現によって逆転、薄は切腹自害する。それを聞いた八重桜は出家、墨染桜となった。

近世初期成立の異類合戦物。『墨染桜』の改題作。物語は『伊勢物語』『平家物語』など古典からの引用をちりばめ、七五調の文章でつづられる。絵ではそれぞれの人物の旗立物がその植物を表す。有朋堂文庫に翻刻がある。(S)

〔55〕たなはた(七夕)

文学部 国文学ⅡNrⅡ19Ⅱ貴重書 <200068> 上下2冊
写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 金泥草木絵紺表紙 本文料紙：斐紙 内題なし、標題は書題簽による 16.2×17.9cm 無辺界 每半丁12行 本文：漢字交り平仮名文

七夕の起源の物語。神武天皇三代の世、ある長者のもとに蛇が三人娘の内一人を与えよとの手紙を持ってくる。応じた末娘の前に大蛇が出現し、その頭の中から貴人が現れて姫と契りを結ぶ。男は自分が天上の天稚彦だと名のり、七日後の再会を約し箱を残して天上に帰る。姫の変わり様をねたんだ姉たちは禁じられていた箱を開けてしまう。姫は雲に乗って天上に昇り、宵明星・帯星などに天稚彦の所在を尋ねつつ伺利天で再会する。だが天稚彦が留守の間に須弥山の鬼神が姫を連れ出し難題を課す。「天稚彦」と唱えたりもらった袖を振ったりして、千頭の牛の世話・千石の米運び・

百足の倉・蛇の倉の難を逃れる。姫は七日を経て清浄の身となり、鬼神も守護神と変わる。天稚彦が月の七日の逢瀬を約すが、姫は年に一度と聞き誤りその悲しみの涙が天の川となる。長者は姫の姿を夢に見て安堵、後には太政大臣にまで登り、二人の姉も后となって末栄えた。

勝俣隆氏に次の紹介がある。「京都大学文学部蔵『たなばた』翻刻及び解題」(『新居浜工業高等専門学校紀要(人文科学編)』23、1987.1)〔56〕も参照。(S)

〔56〕たなはた(七夕)

文学部 美学Ⅱ別置Ⅱ619 <159465> 上下2冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 大和綴 金泥草木流水絵紺色表紙 本文料紙：斐紙 見返：唐草艶出し銀箔置紙 内題なし、標題は書題簽による 24.0×18.3cm 無境界 毎片面10行 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面11図、見開4図、彩色(奈良絵本)

内容は〔55〕参照。本作品には本地物としての要素もあり、牽牛・織女となった天稚彦・姫の本地を文殊菩薩・如意輪観音(〔55〕では勢至菩薩・観音)、鬼神の本地を愛染明王と説く。また別に天稚彦が海竜王と名のり、約束の期日を三七日としたり、一夜ひさごによる姫の天上、難題を課すのを男の父鬼とし、姫の涙ではなく投げた瓜が川になるといった異なる趣向をもって一編に仕立てている同名作品のグループもある。本書・〔55〕それぞれに欠脱箇所があるようであるが、大きな点としては〔55〕に天上の天稚彦の屋敷の四季の景色の描写が脱落していることなどが報告されている。物語集2に翻刻。(S)

〔57〕玉水物語

附図 4-40ⅡタⅡ2 <9189> [上]下1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 黒色表紙 本文料紙：楮紙 24.6×16.0cm 無境界 毎半丁10行 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面7図、彩色

鳥羽辺に住む高柳宰相は仏神に祈って女子を授かる。十四五歳になった姫を狐が花園で見初めた。女に化けた狐は、つてを得て姫に仕え玉水と名付けられる。三年後の十月、紅葉合が催され、狐兄弟の協力で葉に法華経を摺った五色の紅葉を玉水が用意し、姫は勝ちを収める。これを契機に姫の入内^{ものいり}の話がもちあがる。一方、玉水の母が物怪病^{もののけ}みするが、玉水の説得で憑いていた古狐がおちる。御所へ戻った玉水は、姫の

入内にこれまでのいきさつを記した手紙を小箱に入れ、渡して去る。数日後、姫が玉水ゆかしさに箱を開けると長歌などに狐の思いがつづられていた。

人間と動物との交渉の物語であるが、姫を見初めた狐が男に変じて姫との交渉を得るのではなく、同性の女に化けて仕えるという構想は珍しい。物語大成8に翻刻がある。〔112〕参照。(S)

〔58〕[たまみつ物語](玉水物語)

文学部 国文学Ⅱ瀬原文庫ⅡNrⅡ3Ⅱ貴重書 <1058886> 2冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 結綴 内曇表紙 本文料紙：斐紙 18.2×33.3cm 無境界 毎半丁不同行 内外題なし 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面12図、白描、一部彩色

内容は〔57〕参照。(S)

〔59〕玉虫物語

文学部 国文学ⅡPbⅡ52 <167939> 1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 薄茶縹生成地表紙 本文料紙：楮紙 22.8×15.7cm 無境界 毎半丁10行 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 蔵書印：「加藤/之印」(朱文)、「藤/原」(白文) 表紙に「已第五号」の墨書あり 奥書：「于時安政四年丁巳立秋吉旦加藤什」

「簡明目録」では『玉虫の草子』のうち未調査として挙げられるが、内容は浮世草子に分類(国書総目録)される『虫合戦物語』(別名『御伽夜話』など)である。『玉虫の草子』と題する作品では玉虫をめぐって虫たちが恋の歌を詠むのであるが、本書は異類軍記物であり全く趣向が異なる。(S)

〔60〕たまも(玉藻)

文学部 国文学ⅡNrⅡ20Ⅱ貴重書 <332165> 1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 内曇表紙 本文料紙：楮紙 内題なし、標題は書題簽による 17.3×23.5cm 無境界 毎半丁13~14行 本文：漢字交り平仮名文 『くるま僧』(国文学ⅡNrⅡ7Ⅱ貴重書)と同筆 印記：「豊」(黒文)

近衛院の時代、鳥羽院の仙洞に一人の化女が現れた。美人で学識も高く、化生の前と称された。詩歌管弦の遊びが催された折、身体から光を放った化生の前は以後玉藻の前と呼ばれる。彼女を寵愛する院が病に伏し、典薬頭では治せず、高僧たちの祈祷も効かない。陰陽頭安部泰成に占わせると玉藻の前の正体、那須野に住む仏教に仇をなす天竺震旦渡りの狐の仕業とわかる。太山

府君祭の途中玉藻の前は姿を消す。弓の上手上総介と三浦介が那須野に下り、鍛錬の甲斐あって狐を射殺す。都に運ばれた狐は宝蔵に納められ、その身体からは種々宝物が得られたという。

『神明鏡』に類話のあることから南北朝頃の成立かと考えられる。狐退治の訓練に犬を追ったことが犬追物の起源と語られる。〔62〕と極めて近い本文である。(S)

〔61〕玉ものまへ* (玉藻の前)

附図 4-40||タ||貴 <991658> 上中下3冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 大和綴 金泥草木絵紺色表紙 本文料紙：斐紙 24.5×17.8cm 無境界 每片面10行 内題なし、標題は書題簽による 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面15図、彩色（奈良絵本） 蔵書印：「青谿/書屋」（朱文、印主：大島雅太郎）

内容は〔60〕参照。中巻末、斑足王説話に行文の乱れがあり、下巻前半部、公卿詮議の場面上総介三浦介への狐追討勅の場面に錯簡が認められる。当該箇所に関しては文章と絵に表現された場面との齟齬も生じている。(S)

〔62〕たま藻のまへ (玉藻の前)

附図 4-40||タ||別貴 <1041263> 上下2軸 写本 製作年、製作者、書写者不詳 卷子 宝篋模唐茶色布表紙 本文料紙：斐紙 34.8cm 無境界 内題なし、標題は書題簽による 本文：漢字交り平仮名文 彩色絵巻

内容は〔60〕参照。(S)

〔63〕たまものまへ* (玉藻の前)

文学部 美学||別置||620 <159466> 上下2冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 大和綴 金泥秋草若松庭草絵紺色表紙 本文料紙：斐紙 見返：菊花文艶出し銀箔置紙 24.0×18.4cm 無境界 每片面10行 内題なし、標題は書題簽による 本文：漢字交り平仮名文、後筆にて一部振仮名付 挿図：片面8図、見開4図、彩色（奈良絵本）

内容は〔60〕参照。本書では上述の物語の後、殺生石説話が加わる。(S)

〔64〕爲盛發心集*

附図 日蔵||未刊||681 <292444> 3巻（上中下）3冊 刊本 蓮如上人作 享保13（1728）年 [京都] 丁子屋九郎右衛門 四つ目袋綴 薄茶色表紙 本文料紙：楮紙 25.9×17.9cm 無境界 每半丁6行 本文：漢字交り片仮名文、一部振仮名付

源平の合戦で名を馳せた熊谷、平山、津戸、甘粕という四人の武士がいた。熊谷、

平山の二人は法然上人の弟子となり、一心に修行していたが、邪見不当の悪人、津戸三郎為盛は、熊谷たちの教化にも耳を貸さず、上人の房へ足を運ばなかった。それでも二人の熱心な教訓に負け、不審な点を上人に尋ねるべく、しぶしぶ御前に参上する。本作品の中心は以下繰り広げられる法然の説教にあるといってよい。法然の説教に感じた為盛はすぐに上人の弟子になり、罪障を懺悔した後、念仏を唱えて自害する。多くの人が見守る中、紫雲たなびき音楽が聞こえ、為盛は往生する。本文的には漢字片仮名交じりの天正写本（物語大成9に翻刻）に近い。(M)

〔65〕長生帝物かたり (長生の帝物語)

文学部 国文学||Pb||43 <170741> 1冊 刊本 遠山伊清撰 刊年、版元不詳 元禄8（1695）年成立 四つ目袋綴 薄茶色表紙 本文料紙：楮紙 22.2×15.8cm 無境界 每半丁9行 内題なし、標題は打付書外題による 本文：漢字交り平仮名文

時の賢王長生帝は、五十人の后妃・女官に、四季・恋・雑の歌語にちなんだ名を付けていた。そしてそれぞれの名を題とする和歌を詠ませ、自らも一首詠んで興じるのであった。帝の寵愛最も深い妃は、紀貫之の玄孫にあたる紅梅女御であった。女御の産んだ皇女初宮は、聡明で美しいばかりでなく、孝心篤く仏道に心を寄せ、数々の奇瑞を起こす。成人後、両親の勧める縁談も断った。やがて帝・女御・初宮の三人は、降臨した仙人に仙術を授けられ、八月十五夜、ともに白雲に乗って月の都へ昇天したという。

擬歌合物の性格を持つ前半と、儒教色・仏教色の強い神仙譚風の後半とでは、作風も文体もかなり異なる。前半部のみから成る絵巻（藤井隆氏蔵）も伝えられており、後半部は近世に補作されたものかと推測されている。『未刊御伽草子集と研究』3に翻刻がある。(K)

〔66〕月日の御本地

附図 4-40||ツ||1 <30702> 1冊 刊本 刊年、版元不詳 四つ目袋綴 縹色表紙 本文料紙：楮紙 26.2×18.2cm 無境界 每半丁11行 刷題簽書名：ゑ入/月日の御本地（墨書なぞりあり） 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面7図 蔵書印：「悟明」（黒文） 表紙に「正」の白書あり

天竺摩竭陀国のやうこく長者夫婦は千手

観音に祈念して、ほうおう、さんそうという二人の王子を授かる。若君が五歳、四歳になると、観音との約束通り母が病で亡くなる。父長者は後妻を迎えるが、きりうの局という女房は先妻の子供たちを殺そうと画策する。父の留守中に若君たちがしほ水鳥に流されると、母の亡霊は閻魔王に暇乞いをし、観音のはからいにより極楽の大鳥に魂を宿し、二人を養う。継母ときりうの局の奸計を知った父は、しほ水鳥に赴き、親子の対面を果たすが、再会を喜ぶ暇もなく、母は虚空に飛び去っていく。継母ときりうの局は鬼が島へと流され、兄弟は月日となって三千大千世界を照らし、母は明星に、父は菩薩となり月日を守護した。本書と同版の刊本が物語大成9に翻刻されている。(M)

〔67〕付喪神*

附図 8-44|ツ|2貴別 <171248> 2巻(上下) 2軸 写本 義拙詞書、製作年、書写者不詳 卷子 唐花唐草模様唐茶色布表紙 本文料紙:斐紙 26.8cm 無境界 内題なし、標題は書題簽による 箱題:付喪神繪卷 本文:漢字交り平仮名文 彩色絵巻 印記:「大行満/願海藏」(朱文、印主:願海),「奉納阿都山/寺流芳萬年/大行満願海」 奥書:「写本云/此付喪神上下二巻之繪卷/書写畢詞書者僧義拙書之/寛文六年月日 頼業」,「付喪神繪詞二巻為/……」

康保の頃、暮れの煤払いで捨てられた古道具たちが人間への復讐を図って、数珠一連の制止も聞かず、古文先生の教えに従って妖物と変じる。船岡山の後ろに群拠し、都へ出ては悪さをする。変化大明神を祀り、卯月五日に一条大路を行列した折、関白に行き会って尊勝陀羅尼の威力に退散する。さらに護法童子の追討を受けて改心、一連のもとで修行し成仏を果たす。

室町時代の成立。古道具という非情物の成仏を描き、真言密教の優性を説く。本書は近世の模本であるが、器物の妖怪という設定は『百鬼夜行絵巻』にも通じる。(S)

〔68〕鶴のさうし(鶴の草子)

附図 4-40|ツ|2 <14683> 上中下合綴1冊 刊本 寛文2(1662)年 [京都] 婦屋仁兵衛 四つ目袋綴 布目地丹表紙 本文料紙:楮紙 25.4×17.5cm 四周単辺 毎半丁11行 書題簽書名:鶴の草紙 柱題:鶴草紙 本文:漢字交り平仮名文、一部振仮名付 挿図:片面24図、見開1図 蔵書印:「角田/家藏」(朱文),「福田文庫」(朱文、印主:福田敬同)

慈悲心の深すぎるが故に凋落していた宰相右衛門督は、刀と引き替えに獵師に捕まえられた鶴を助けてやる。ある夕暮れ女房が訪ね来て契りを交わし、その持参の千両で長者となる。北の方に横恋慕した国司が武力で奪おうとするが、鳥や虫に防がれ、国司は出家する。北の方は宰相に次世での再会を約し、正体を明かして去る。一方、三条内大臣の娘玉鶴姫は婚儀を前にした十四歳の春、生まれつき不自由であった左腕が治り、脇の下から歌句を記した玉章が見つかる。全国を探して連れ出された宰相によってその玉章がかつて女房と形見に取り交わした物であることが判明し、姫と結婚する。以後宰相は左大臣正明と名乗り、五人の子もそれぞれ高位に着き、いよいよ富み栄えた。

鶴女房をはじめ、高位者の横恋慕、異界訪問、生まれ変わりなど様々な要素から構成されている。物語大成9に翻刻。なお「簡明目録」には京大蔵奈良絵本も記載されるが、現在は不明。(S)

〔69〕天竺物語

文学部 国文学|Nr|22 <84758> 1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 後補紫色表紙 本文料紙:楮紙 26.5×19.8cm 無境界 毎半丁11行 首題なし、標題は後補書題簽による 扉(元表紙):天竺物語 扉裏題:天竺之物語 本文:漢字交り平仮名文

〔104〕と同じく『阿弥陀の本地』として知られる物語である。天竺西城国の善生太子は、東城国の姫宮あしゆく夫人に恋し、一人東城国へ向かう。三年三月の歳月をかけて東城国へ着いた太子は夫人と結ばれるが、父王の怒りに触れ、深山に捨てられる。せんくわう、せんしんの二王子が生まれると、太子は妻子を迎えるために自国へと向かう。西城国では太子の帰還を喜び、太子は即位し十年あまりをすごす。残された夫人は太子を待ちかねて二人の王子と共に東城国へ旅立つが、途中で病を得て亡くなる。二人の王子は再び東城国を目指し、途中で父の一行に出会い、親子の対面を果たす。夫人の死を知った太子は出家し法蔵比丘と名乗り、王子たちと共に阿弥陀三尊と現れた。

本作品は原拠となったと考えられていた偽経『大乘毘沙門功德経』が近年発見されたことでも有名である。本書は七五調の文が多く、本文的には慶應義塾図書館蔵本、

学習院大学国文学研究室蔵本と近い。巻末に「九相詩の歌」を載せる。(M)

〔70〕天神御縁起*

附図 平松||5||テ1 <146797> 1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 素紙表紙 本文料紙：楮紙 28.2×20.7cm 無辺界 毎半丁9行 首題なし、標題は打付書外題による 扉題：天神之私 本文：漢字交り片仮名文

〔19〕と同様、北野の天満天神となった菅原道真の物語であるが、内容的には〔19〕に比してかなり詳細である。道真流罪までの経緯、配所に赴く道真や周辺の人々の嘆き、太宰府での道真の怒り、誓願、死去、都の北の方の嘆き、僧正による醍醐天皇の教化、日蔵の地獄巡りなどの挿話はかなりの分量を占めている。随所に様々な故事なども含み、他のお伽草子とは全く系統の異なる本と思われる。(M)

〔71〕東勝寺鼠物語

文学部 国文学||Nr||23||貴重書 <191717> 1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 後補砂子散らし黒色表紙 本文料紙：楮紙 27.1×20.7cm 無辺界 毎半丁8行 本文：漢字交り片仮名文、一部振仮名付

京の鼠阿弥陀仏、諸国巡礼の後奥州にて分限の鼠一族が猫に殺されたあと、その五十四郡の主となる。その子孫の鼠夫婦は美濃国山縣郡大桑郷から東勝寺に移り住む。幼い鼠たちは家具書籍等を荒らす。月待の夜、殺生戒にもかかわらず僧たちが子鼠を殺して焙り食う。それも鼠の悪行の報い。その後親鼠は悟り、子を偲び、寺内・在家の福貴繁昌を守護することを述べる。

東勝寺の禅僧によって天文6（1537）年に成立。鼠を主人公とした物語を構えるが、目立つのは物語の筋よりも各事項に列举される名辞であり、そうした点から童蒙教育を目的とした類書性格の強いものと考えられている。現存は本書のみ。(S)

〔72〕中くほ物語

附図 4-30||ナ||1 <41921> 1冊 写本 製作地、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 後補薄茶色表紙 本文料紙：楮紙 26.5×20.6cm 無辺界 毎半丁11行 首題なし、標題は打付書外題及び扉（元表紙）による 本文：漢字交り平仮名文

〔4〕〔6〕と同じ内容の物語だが、書名の由来は不明。本文も独特のことが多い。(K)

〔73〕七くさ（七草）

文学部 国文学||Nr||24||貴重書 <565781> 1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 七宝文空押黒表紙 本文料紙：斐楮混合紙 首題なし、標題は扉（金泥草木絵濃紺元表紙）による 16.2×23.5cm 無辺界 毎半丁12行 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面3図、彩色（奈良絵本） 蔵書印：「愚佛文庫」（角、朱文）、「愚佛/文庫」（丸、朱文）

今回新たに貴重書に指定された奈良絵本である。七草の行事の由来を描いた祝儀物。唐のたいしやうは百歳の両親が老い衰えたことを嘆き、若返らせてほしいと天に祈ったところ、帝釈天が若返りの薬の作り方を授ける。教えに随って正月に七色の草を集め、若水と共に服させると両親はたちまち若返った。このことを聞いた帝はたいしやうに位を譲り、国も民も大いに栄えた。

本作品には広本、略本の二系があるが、本書は略本系の本文である。(M)

〔74〕はちかづき（鉢かずき）

文学部 国文学||Nr||25 <543592> 下1冊 刊本 貞享元（1684）年 [大坂] 作本屋八兵衛板 四つ目袋綴 黒色空押表紙 本文料紙：楮紙 22.2×15.9cm 四周双辺（子持） 毎半丁14行 刷題簽書名：宰相恋物語：はちかづき 柱題：はちかつき 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 挿図：見開3図

『御伽文庫』にも収められた、著名な継子譚。姥皮型の民間説話に取材し、長谷観音の靈驗譚でもある。本書は下巻のみが伝わるが、他本により前半部を補って梗概を記す。河内国交野に住む備中守さねたかの一人娘は、十三歳で母と死別する。臨終の母が姫にかぶらせた鉢は、どうしても取ることができなかった。後に迎えられた継母は、姫を疎んじ野の中に捨てさせる。姫は川に身を投げたが、鉢のために沈まず、岸に引き上げられる。やがて国司山蔭三位中将に拾われ、湯殿の火焚きを勤める。その家の四男宰相が姫を見初め、人の噂する仲となる。宰相の母は、姫を辱めようと嫁比べを計画する。折しも姫の鉢が取れ、中から様々な宝物が出てくる。姫の美貌と教養は兄嫁たちを圧倒し、宰相は総領に定められる。宰相の妻として栄華を極めた姫は、子供たちを引き連れて長谷寺に参詣し、没落して修行者となっていた父と、偶然再会を果たした。

本作品の刊本は、古活字版の系統と万治2（1659）年松会刊本の系統に大別される

が、本書は御伽文庫本と同様、前者に属する。刊本の本文系統については、松本隆信「御伽草子本の本文について（二）－鉢かづきの草子－」（『斯道文庫論集』3、1964.3）に詳しい。（K）

〔75〕はちかつき*（鉢かづき）

文学部 国文学ⅡNr141 <2490360> 1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 素紙表紙 本文料紙：楮紙 17.7×14.0cm 無辺界 每半丁9行 本文：漢字交り平仮名文

本書の本文は、冒頭数丁は古活字版系統の特徴を持つが、全体としては松会刊本系統に近い。（K）

〔76〕はちかづき（鉢かづき）

文学部 国文学Ⅱ類原文庫ⅡNr14 <1029435> 上下合綴 1冊 刊本 寛文6（1666）年、版元不詳 四つ目袋綴 雷文地唐草空押濃紺表紙 本文料紙：楮紙 25.8×18.2cm 四周単辺 每半丁16行 後補書題簽書名：鉢かつき 柱題：はちかつき 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面1図、見開3図 蔵書印：「霞亭文庫」（朱文、印主：渡辺霞亭）落丁あり

本書の本文は松会刊本にほぼ一致する。古活字版系統と内容は変わらないが、文章表現に異同がある。なお、落丁により本文の一部を欠いている。（K）

〔77〕はちかつき*（鉢かづき）

総合人間学部 413Ⅱ47Ⅲ貴重書 <三高56623> 1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 内曇表紙 本文料紙：斐紙 17.1×24.8cm 針穴による天地界 每半丁12行 内題なし、標題は書題簽による 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面9図、彩色（奈良絵本） 蔵書印：「第三高/等學校/圖書印」

未紹介の奈良絵本。御伽文庫本に代表される流布本に比べ、内容・文章ともかなりの相違がある。同様の内容を持つ御巫清勇氏旧蔵奈良絵本（物語集3に翻刻）とは、本文から挿絵の位置までほぼ一致する。

内容上の主な特徴としては（欠けている上巻の部分は、御巫氏旧蔵本により補う）、姫を長谷観音の申し子と明記する点、姫がいただく鉢と箱も観音の授かり物であったとする点、男君を関白殿の長男中将殿とする点、中将の口説き文句がほとんど省略されている点、姫の入水が中将と契りを結んだ後、しかも関白の命により淀川へ投げ込まれることになる点、父との再会場面がない点などが挙げられる。（K）

〔78〕はちかづきさいしやうの君*（鉢かづき宰相の君）

附図 4-40Ⅱハ12 <56565> 上下合綴 1冊 刊本 松會開板、刊年不詳 四つ目袋綴 雷文地龍文白色表紙 本文料紙：楮紙 26.6×18.6cm 四周単辺 每半丁15行 後補書題簽書名：はちかつき物語 柱題：はち 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面2図、見開3図 蔵書印：「角田/家藏」（朱文）、「福田文庫」（朱文、印主：福田敬同）

『鉢かづき』の一本。本文は万治2年松会刊本とほとんど同じ。（K）

〔79〕[はちかづきさうし]*（鉢かづき草子）

文学部 国文学ⅡNr140Ⅲ貴重書 <2490359> 1帖 写本 製作年、製作者、書写者不詳 粘葉装（変形） 後補柳色表紙 本文料紙：斐楮混合紙 30.3×20.8cm 無辺界 每半丁10～11行 内外題なし 本文：漢字交り平仮名文 欠落あり

御伽文庫本に近い本文を持つ写本である。現状は全面的に改装されており、半丁分の欠丁が十二箇所、一丁分の欠丁が一箇所ある。（K）

〔80〕はちかづきのさうし（鉢かづきの草子）

附図 4-40Ⅱハ11 <14596> 上下2冊 刊本 宝永2（1705）年 和泉屋茂兵衛板 四つ目袋綴 市松文空押紺色表紙 本文料紙：楮紙 25.5×18.7cm 四周単辺 每半丁14行 刷題簽書名：畚入/はちかつき 下巻首題：はちかづきさうし 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 挿図：片面6図

『鉢かづき』の一本で、本文は古活字版の系統に属する。（K）

〔81〕八幡の御本地*

附図 4-40Ⅱハ13 <164076> 上中下1冊 刊本 [明治期刊] 東京 武田傳右衛門[ほか]發賣 四つ目袋綴 布目地濃紺表紙 本文料紙：楮紙 26.0×18.6cm 四周単辺 每半丁10行 承應2（1653）年山本長兵衛板の後摺 刷題簽書名：八幡之本地 柱題：八幡 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 挿図：片面3図、見開10図

〔82〕と同様、承應2年版丹緑本（物語大成10に翻刻）の明治期後摺本。彩色はされていない。神功皇后は白髭の老翁の助けを借り、竜宮の干珠・満珠という玉を手に入れ、新羅、百済を従え帰国する。その時に生まれた皇子が応神天皇であり、今の八幡大菩薩であるとする。また男山八幡宮、箱崎八幡宮などについても述べる。（M）

〔82〕八幡の御本地*

文学部 国文学ⅡNr130 <128677> 上中下2冊 刊本

[明治期] 大阪 文榮堂（前川善兵衛） 四つ目袋綴 紗綾形空押浅葱色表紙 本文料紙：三極紙か 24.6×18.2cm 四周単辺 毎半丁10行 承應2（1653）年山本長兵衛板の後摺 刷題簽書名：八幡之本地 柱題：八幡 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 挿図：片面3図、見開10図

〔81〕と同様承應2年版本の後摺本。（M）

〔83〕花みつ

文学部 国文学ⅡNr||26||貴重書 <116118> 上下2冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 内曇表紙 本文料紙：斐紙 内題なし、標題は書題簽による 上) 18.3×25.7cm、下) 17.8×26.4cm 無境界 毎半丁16行 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面16図、彩色（奈良絵本）

播磨国を治める赤松の家来岡部は、申し子を授かり花みつと名付ける。後に主君の命で上京した折、月みつという男子を儲け、母子を連れて帰国した。十歳になった花みつは、学問のため、稚児として書写山別当に預けられる。やがて月みつも後に続き、可憐な兄弟は一山の寵児となった。しかし花みつの母が病死した後、月みつの母は花みつのことを岡部に讒言する。父に疎まれたと誤解して世をはかなんだ花みつは、懇意にしていた二人の法師に、月みつを殺すよう頼む。しかし、法師たちが約束通り斬り殺した稚児は、月みつに変装した花みつであった。覚悟の死を前に、親兄弟への真情を歌に綴った花みつの遺書は、人々の涙を誘った。岡部・月みつをはじめ、別当や二人の法師も皆発心・遁世して、花みつの菩提を弔ったという。

稚児物に継子譚の要素を組み合わせた、哀愁漂う一編である。有朋堂文庫に翻刻がある。（K）

〔84〕はもち中納言

文学部 国文学ⅡNr||31||貴重書 <175376> 3冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 布目地後補黒表紙 本文料紙：斐紙 内題なし、標題は後補書題簽による 16.6×24.7cm 無境界 毎半丁12行 本文：漢字交り平仮名文

流人羽持が上洛の留守中、その北の方を白杵が横恋慕し、失敗、讒言に及ぶ。羽持が蝦夷へ流された後の一家は忠臣の尽力で各所に落ちのびる。北の方・末子は人買いにあたり、長男・次男は仇とは知らずに白杵に育てられるなどの悲劇を抱えるが、のちに子供たちの活躍で白杵を討ち一家再

会、繁栄する物語。

室町末から江戸初期頃の成立。物語の構想には『曾我物語』からの影響が大きく、また古浄瑠璃『よしうじ』へ影響を与えた。なお書名にある「中納言」の称は物語中ではなく、何によるものか不明。物語大成10に翻刻あり。（S）

〔85〕火おけのさうし（火桶の草子）

附図 4-40||ヒ||1 <17732> 1冊 刊本 刊年、版元不詳 四つ目袋綴 紗綾形文地牡丹唐草空押黒表紙 本文料紙：楮紙 24.8×17.4cm 無境界 毎半丁10行 打付書 外題：火おけ草子 柱題：ひおけ 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面5図、彩色（丹緑本） 蔵書印：「田邨」（朱文）

後半部分が失われているため、その部分は同版の赤木文庫蔵本（物語大成11に翻刻）を参考に梗概を示す。ある片田舎に老夫婦が住んでいた。翁は夜になると火桶を寵愛し、それを題に歌を詠んだりしていた。それに嫉妬した姥は、ある時翁の留守中にまさかりで火桶を割ると火桶は血を流す。翁は姥を責め、ここから儒教、仏教、和歌などを説いた二人の問答となるが、最後には姥の一蓮托生を願おうという言葉に翁が感じ、火桶を善知識として成仏の道を願おうと誓う。様々な故事や説話が含まれ、教訓的な色彩が濃い物語となっている。（M）

〔86〕びじんくらべ（美人比べ）

附図 4-40||ヒ||2 <14685> 上下2冊 刊本 万治2（1659）年〔京都〕石津八郎右衛門開板 五つ目袋綴 雷文地牡丹花空押黒色表紙 本文料紙：楮紙 25.5×17.0cm 四周単辺 毎半丁12行 標題は下冊首題による 上冊題簽書名：美人くらべ 上冊首題：びしんくらへ 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面6図、見開3図 蔵書印：「角田/家藏」（朱文）

公家物の継子譚・恋愛譚。散逸王朝物語『ふせや』を改作したお伽草子に『伏屋の物語』があり、その内容は本作品と酷似する。本作品を『伏屋の物語』の一異本とする説、あるいは、『伏屋の物語』とは別に、『ふせや』から直接改作されたものとする説がある。『伏屋の物語』と比較すると、人名に加え、姫君の生い立ちを語る冒頭部分を欠くという相違がある。

五条宰相には二人の娘がおり、先妻の遺児をのませ姫、現在の妻の子をしらん姫といった。姉妹に心を寄せる丹後少将は、清

水寺で二人を見比べ、のもせ姫に通い始める。怒った継母は武士に姫の殺害を命じるが、武士は姫に同情して逃がす。偶然出会った熊野下向の尼が、姫を信濃国の伏屋に伴う。住吉社で夢を得た少将は、翁の姿で現れた明神に助けられ、伏屋に辿り着いて姫と再会する。上京した少将と姫は末永く繁栄し、尼も所領を賜った。一方継母は天罰を蒙り、自害して果てたという。物語集3に翻刻がある。(K)

〔87〕一もときく（一本菊）

附図 4-40|||3 <17743> 上中下3冊 刊本 西村開板、刊年不詳 四つ目袋綴 雷文地牡丹唐草空押灰青色表紙 本文料紙：楮紙 26.7×18.2cm 四周単辺 每半丁14行 刷題簽書名：一本さく 柱題：一本 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面14図、見開1図 蔵書印：「田邨」（朱文）

継子譚を基本とする公家物で、散逸王朝物語『あだ波』の改作とされる。お伽草子の中では比較的複雑な筋を持ち、構想の整った作品である。

故右大臣の先妻腹の姫君は、父の遺愛の一本菊を献上した縁で、兵部卿宮の通うところとなる。それを妬んだ継母は、実子と共謀して帝に讒奏し、姫君の兄兵衛佐に無実の罪を着せる。兵衛佐は恋人の侍従内侍や妹の姫君に別れを告げ、鬼界島へ流される。継母はさらに企みをめぐらし、姫君を誘拐した上、侍従内侍を実子の妻にしようとする。内侍は宮中から脱出し、薩摩へ下って兵衛佐と再会する。幽閉されていた姫君も、長谷参詣の帰途通りかかった兵部卿宮に救出される。やがて宮は即位し、姫君は後に、その間に生まれた若君が東宮となる。継母たちは流罪を免ぜられ、洛外に追放された。召還された兵衛佐は関白にまで昇進し、侍従内侍も北政所となり、一族は末々まで繁栄したという。(K)

〔88〕ふくらう（ふくろう）

附図 4-40||フ||1貫 <17733> 1冊 刊本 刊年、版元不詳 四つ目袋綴 雷文空押黒色表紙 本文料紙：楮紙 24.6×17.0cm 無境界 每半丁10行 内題なし、標題は後補書題簽による 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面7図、見開1図、手彩色（丹緑本） 蔵書印：「樂陽堂」（朱文），「浅草北松山町/古今珍書繪/樂陽堂染谷」（朱文），「百井文庫」（朱文，印主：百井為衡），「百/井」（白文，印主：百井為衡）

加賀亀割坂の八十三歳になる梶が鶯姫に

恋し、烏・鶯に相談、山雀^{やまから}に恋文を託す。神仏に祈誓し御山薬師に願書を上げる。鶯は受け取りを渋ったが山雀に口説かれ返事を書く。梶が鶯からの返事に落胆していると夢に薬師が現れ返事を謎解きしてくれ、阿弥陀堂で鶯との契りを結んだ。その噂を聞いた様々の鳥たちが鶯に恋歌を送るが、かねて鶯に懸想していた上見ぬ鷹は怒りのあまり鶯を殺害する。自害を計った梶だが木菟^{みづう}の助言で梓巫女を呼んで鶯の霊と会い、それから剃髪、諸国を巡って鶯の菩提を弔った。

梶が鶯姫に送った長い恋文には、物尽くし・例え話がふんだんに用いられており、他のお伽草子でもみられるように啓蒙的な時代の好尚が表れている。また、本作品は仮名草子『あだ物語』の成立に影響を与えた。有朋堂文庫に翻刻。(S)

〔89〕富士草幣

文学部 国文学||Nr||27||貴重書 <152761> 1軸 写本 製作年、製作者、書写者不詳 卷子 唐花唐草模様木色布表紙 本文料紙：楮紙 30.7cm 天地押界 内題なし、標題は書題簽による 本文：漢字交り平仮名文 彩色絵巻（奈良絵本） 蔵書印：「このぬし/せんくわ」（朱文，印主：笠亭仙果）もと冊子を改装

正治元年、頼家は和田平太を召して富士の人穴探検を申しつける。和田は人穴へ入っていくが、美しい女房が現れ追い返される。そこで今度は仁田四郎が名乗りを上げ、人穴へ向かうが、大蛇があらわれ仁田に太刀を乞う。仁田が太刀を与えると大蛇は浅間大菩薩の姿を現し、六道を案内する。最後に大菩薩は地獄極楽の様子を描いた草子を仁田に与え、三十一歳までは人穴のことを語ってはいけないと誡める。しかし頼家の命に背くことはできず、人穴の不思議を語ったところ、雷が鳴り響き仁田は命を落とす。

中心となるのは六道めぐりの描写であり、特に地獄の部分は様々な罪に応じた地獄の描写に筆がさかれている。ただし多くの絵入り本の挿絵が地獄の凄惨な有様をくわしく描写するのに対し、本書は女房が極楽へと迎え取られる場面に最も多く紙幅を費やしているのが特徴的である。本文的には〔90〕などの刊本と同系統である。(M)

〔90〕ふじの人あなさうし（富士の人穴草子）

附図 4-40||フ||2 <30709> 上下合綴1冊 刊本 明暦4

(1658) 年 山田市良兵衛開板 四つ目袋綴 黒色表紙
本文料紙：楮紙 24.8×18.2cm 四周単辺 毎半丁14行
下冊題簽書名：ふしの人あな/繪入 本文：漢字交り平仮
名文、一部振仮名付 挿図：片面8図 前見返に「式番」の
墨書あり

〔89〕と同内容の物語。本文は慶安3
(1650) 年版を踏襲している。(M)

〔91〕佛鬼軍*

附図 8-44||フ||4 <32971> 1冊 刊本 文政6 (1823)
年[跋刊] 四つ目袋綴 布目地雲形文薄茶色表紙 本文料
紙：楮紙 26.3×18.2cm 四周単辺 毎半丁8行 首題な
し、標題は刷題簽及び扉による 文政6年 筠庭節信跋
本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 挿図：片面6
図、見開9図 後見返に「江戸本石町十軒店萬笈堂英平吉
藏板法帖目錄」を付す 蔵書印：「書林/尾州名古屋/大野
屋惣八/長嶋町五丁目」(黒文、印主：大野屋惣八) 表紙
に「ま三百五拾六」の墨書貼紙あり

〔11〕の項参照。文政六年刊本の再刊本。
十念寺本を祖本とし、挿絵もそれを踏襲す
るが、筆致はかなりくだけたものとなっ
ている。(M)

〔92〕佛鬼軍*

附図 谷村文庫||1-26||フ||2 <91000542> 1冊 刊本
[明治年間] 東京 須原屋茂兵衛[ほか] 四つ目袋綴 布目地
表紙 本文料紙：楮紙 26.3×18.5cm 四周単辺 毎半丁
8行 文政6 (1823) 年跋刊本の後摺 首題なし、標題は
刷題簽及び扉による 文政6年 筠庭節信跋 本文：漢字
交り平仮名文、一部振仮名付 挿図：片面6図、見開9図
蔵書印：「春城/清玩」(朱印、印主：市島春城)「交埜/藏
書」(朱印、印主：片野邑平)「原宿文庫」(朱印、印主：
片野邑平)「かた廻文庫」(朱印、印主：片野邑平か)

〔91〕と同様、文政六年刊本の再刊本。
(M)

〔93〕佛鬼軍*

文学部 美学||別置||430 <165317>

〔11〕の項参照。十念寺本を絵、詞書共
に忠実に模写したもの。模写の時期は不明
であるが、おそらく明治以降であろう。
(M)

〔94〕佛鬼軍*

文学部 印哲||S.Ⅲ||30 <160077> 1冊 写本 享保14
(1729) 年 袋仮綴 素紙共表紙 本文料紙：楮紙
24.6×17.2cm 無境界 毎半丁9行 本文：漢字交り片仮
名文、一部振仮名付 奥書：「右巻物二軸賛盡雜書十念寺
之什物而一/休作之賛土佐光信作之畫也其寫軸在法泉/享
保十四己酉歲借三月而寫之替也」

〔11〕の項参照。ただし錯簡があり、十
念寺本に欠けていた部分を全て含むかど
うかは未詳といわざるをえない。(M)

〔95〕ふんしゃう* (文正)

附図 4-40||フ||2貴 <1829033> 1冊 写本 製作者、
書写年、書写者不詳 四つ目袋綴 薄茶色表紙 本文料
紙：斐楮混合紙 16.5×23.0cm 無境界 毎半丁15行 内
題なし、標題は書題簽による 本文：漢字交り平仮名文
挿図：片面15図、彩色 (奈良絵本)

〔42〕と同じく『文正草子』の一本で、
下巻のみが伝存する奈良絵本。本文は赤木
文庫旧蔵の奈良絵本(物語大成12に翻刻)
に近似し、挿絵の位置もほぼ一致する。
(K)

〔96〕ふん正* (文正)

文学部 美学||別置||621 <159467> [上]下2冊 写本
製作年、製作者、書写者不詳 大和綴 金泥秋草草木絵
紺色表紙 本文料紙：斐紙 見返：布目地金箔置紙
24.2×17.5cm 無境界 毎片面11行 内題なし、標題は下
冊書題簽による 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面
11図、彩色 (奈良絵本)

『文正草子』の一本で、彩色美しい奈良
絵本。本文は〔98〕に挙げた寛永頃刊本
に近い。なお、下巻の最後の挿絵が欠けて
いる。(K)

〔97〕ぶんしやうのさうし (文正の草子)

附図 4-40||フ||5 <56566> 上下2冊 刊本 [京都] 水
田甚左衛門開板、刊年不詳 五つ目袋綴 雷文地牡丹唐
草空押濃紺表紙 本文料紙：楮紙 27.2×18.3cm 四周単
辺 毎半丁16行 刷題簽書名：新板/ふん正さうし 柱
題：ふん 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面3図、見
開4図、彩色 (丹緑本)

〔98〕に挙げた寛永頃刊本の本文を、ほ
ぼ忠実に踏襲した刊本である。(K)

〔98〕ぶんしやうのさうし* (文正の草子)

文学部 国文学||Nr||42 <2496786~7> 上下2冊 刊本
刊年、版元不詳 四つ目袋綴 雷文地菊花文空押紺色表
紙 本文料紙：楮紙 26.8×18.6cm 無境界 毎半丁11行
柱題：ふんしやう 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片
面10図、見開2図、一部彩色 蔵書印：「寶鏡寺」

本書は、物語集5・物語大成11に翻刻さ
れている寛永頃刊本と同版と推測される。
同刊本は、『文正草子』諸本の内、最も流
布した刊本の祖に位置付けられるもので、
『御伽文庫』所収本とは本文系統を異にす
る。冒頭近くに文正の詠歌を記す点、中将

東下りの場面で五首の和歌をまとめて列挙する点が、大きな特徴である。(K)

〔99〕平家花揃

文学部 国文学Ⅱ類原文庫ⅡNrⅡⅡ貴重書 <879038> 1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 銀色表紙 本文料紙：斐紙 14.5×21.4cm 無境界 毎半丁12行 本文：漢字交り平仮名文 奥書：「右平家花揃名目五拾三人任旧本書写之平家音曲之座頭/先可覚之然則十二卷之大鉢以明拙詞加註之畢而可知其来歴者乎/寛永壬午上陽日 道門居士」 蔵書印：「成齋/蔵書」(白文，印主：重野家緯)，「重野/家緯」(白文，印主：重野家緯)

『平家物語』のうち、主として平家ゆかりの登場人物について評し、その人物を花や風景に喩えて述べる。本文序には、高倉院の時代に雲上人、女房たちが平家の人々を花にたとえ歌に詠んだものがあり、平家の滅亡後さらに増補され原形となった、との説を載せるが、実際には室町末期の成立と考えられる。本作品は物語ではなく、序に「此一巻を平家物語に加へて読みたらんには其人の有様を知りそのゆかりをもわきまへていよいよ哀まさり心さし深からんものならし」とあるように平家物語をより深く鑑賞するための副読本的な性格のものである。本書の特徴としては、神戸良政による序跋が付されていること、各人物についての略歴、平家物語中の場面を注として加えていることがあげられる。榊原千鶴氏が翻刻をされている(『京都大学蔵平家花揃翻刻』『名古屋大学国語国文学』79、1996.12)。(S)

〔100〕弁慶物語

附図 4-40ⅡへⅡⅡ貴重 <836602> 1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 五つ目袋綴 共表紙 本文料紙：きら入斐紙 33.0×22.1cm 無境界 毎半丁11行 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 挿図：片面10図、彩色(奈良絵本) 蔵書印：「山」(朱文) 元表紙、本文前半を欠く

下巻のみが現存。錯簡箇所があるものの、本文は慶安4(1651)年刊本にほぼ一致する。絵に関しては全十図中八図が刊本の挿図と一致。また弁慶の肌の色が義経との主従関係を結ぶ前後で薄墨色から肌色へと塗り分けられているのが印象的である。京都大学国語国文学研究資料叢書『弁慶物語』に影印、池田敬子氏による解説がある。内容は〔101〕参照。(S)

〔101〕弁慶物語

文学部 国文学ⅡNrⅡ32a <128379> 上下1冊 刊本 刊年、版元不詳 四つ目袋綴 後補紫色表紙 本文料紙：楮紙 26.8×18.2cm 四周単辺 毎半丁12行 後補書題簽書名：辨慶物語 柱題：弁 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 挿図：片面17図

熊野別当弁心は若王子に申し子して子を得るが、鬼子として山中に捨てる。若王子の示現を受けた五条大納言が、その子を若一と名付けて養育する。七歳で比叡山に登ったが乱暴重なり追放され、自剃受戒し武蔵房弁慶と名乗る。老僧の衣を奪い、都で太刀・具足を調達、渡辺館の一件を治めて赴いた平泉寺で諍いをおこし、書写山でも僧との争いが高じて寺を炎上させる。その復興に努めた後、平家の刀を狙う。義経との三度の出会い、決闘を経て主従となる。義経十九歳、弁慶二十六歳であった。二人を恐れた平家が拉致した師僧を救出するため弁慶は六波羅へ出向く。義経の在所を知らんと取引をはかる吉内を嘲弄し、六条河原に引き出されたところを脱出、義経と再会し、平家打倒の誓いを固め奥州へと発つ。

『義経記』巻三に描かれる弁慶の物語と通じる内容。上巻では各地で乱暴を繰り返す弁慶が描かれ、下巻では義経・師僧との主従・師弟関係をめぐる物語となっている。色白小男の義経と色黒大男の弁慶という像をもって描かれる。『室町時代小説集』に慶安4年刊本の翻刻あり。(S)

〔102〕弁慶物語

文学部 国文学ⅡNrⅡ32b <198572> 上下1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 藍色表紙 本文料紙：楮紙 27.2×21.7cm 無境界 毎半丁11行 本文：漢字交り平仮名文

物語の展開は基本的には〔101〕と同じだが、独自の『弁慶物語』を目指した点も見受けられる。いくつかその例を示せば、弁慶の名付け受戒の場面を詳しく描く・書写山へ向かう道中を道行文でつづる・都で噂になっている弁慶を義経の側でも捜している・話末近くの平重盛と義経との対立を描かない・義経弁慶の主従を賞賛して話を閉じる、などが挙げられる。また、師僧の名を慶俊(刊本は慶心)、義経との決闘を六条河原(刊本は五条橋)とするなどの相違もある。京都大学国語国文学研究資料叢書『弁慶物語』に翻刻、解説がある。(S)

〔103〕弁慶物語*

文学部 国文学||類原文庫||Nr||1||貴重書 <879078> 2
卷(上下)合綴1冊 刊本 刊年, 版元不詳 五つ目袋綴
焦茶色表紙 本文料紙: 楮紙 27.2×17.6cm 四周単辺
毎半丁12行 柱題: 弁 上巻尾題: 物語 本文: 漢字交
り平仮名文 挿図: 片面16図, 一部手彩色 蔵書印: 「平
塚蔵書」(朱文) 前見返に「主/長光寺」の墨書あり

内容は〔101〕参照。(S)

〔104〕ほうさうひくのさうし(法蔵比丘 の草子)

文学部 国文学||Nr||29 <235316> 1冊 写本 正保3
(1646)年 書写者不詳 四つ目袋綴 布目地縹色後補表
紙 本文料紙: 楮紙 23.9×17.4cm 無境界 毎半丁8行
首題なし, 標題は扉(元表紙)による 打付書外題: ほう
ぞうびくのさうし 本文: 漢字交り平仮名文

〔69〕と同内容の物語。本書も七五調の
文が多いが、本文的には〔69〕とは系統
を異にする。(M)

〔105〕ほうまん長者(宝満長者)

附図 4-40||シ||5 <33306> 1冊 刊本 刊年, 版元不
詳 四つ目袋綴 藍色表紙 本文料紙: 楮紙 22.3×
15.9cm 四周単辺 毎半丁13行 刷題簽書名: 新板繪入
十王讃嘆抄 目録題: 寶満長者 (十王讃嘆抄の第5冊)
本文: 漢字交り平仮名文 挿図: 片面1図, 見開2図

天竺摩伽陀国の宝満長者は多くの宝をも
っていた。中でも貴重な四種の宝のことを
帝が聞き、差し出すように命じると、長者
は少しも惜しまず宝を差し出し、勅使に他
の宝を見せてまわるが、三重の塔の中にあ
る三つの黄金の箱だけは開こうとしない。
帝の前でなら開くということで三つの箱を
持ち参内する。一つ目の箱には法華経、二
つ目の箱には六字の名号が入っていた。三
つ目の箱には両親の頭骸骨が入っており、
帝の怒りを買うが、長者は親の恩の重さを
説き、親孝行の大切さを強調する。帝は四
種の宝と三つの箱を長者に返し、左大臣に
任じる。

なお本書は〔106〕、〔107〕と同版と思
われるが、談義本の『十王讃歎抄』の第五
冊とされている。『十王讃歎抄』は中有の
死後審判の様子を説くことにより、死後の
追善の重要性を説くもので、亡親の追善が
最も優れた孝行であると強調する点で本作
品と共通するところがあるので、意図的に
合冊されたものと考えられる。(M)

〔106〕ほうまん長者(宝満長者)

文学部 国文学||Nr||28 <129550> 1冊 刊本 刊年,
版元不詳 四つ目袋綴 雷文地雲龍文空押納戸色表紙
本文料紙: 楮紙 22.5×15.5cm 四周単辺 毎半丁13行
目録題: 寶満長者 本文: 漢字交り平仮名文 挿図: 片
面1図, 見開2図

〔105〕の項参照。(M)

〔107〕ほうまん長者(宝満長者)

文学部 国文学||類原文庫||Pb||70||貴重書 <1029297>
1冊 刊本 刊年, 版元不詳 四つ目袋綴 紺色表紙 本
文料紙: 楮紙 22.6×16.1cm 四周単辺 毎半丁13行 書
題簽書名: 寶満長者 本文: 漢字交り平仮名文 挿図:
片面1図, 見開2図 蔵書印: 「永田文庫」(朱文, 印主: 永
田有翠), 「駿臺文庫」(朱文)

〔105〕の項参照。(M)

〔108〕ほうらい物語(蓬莱物語)

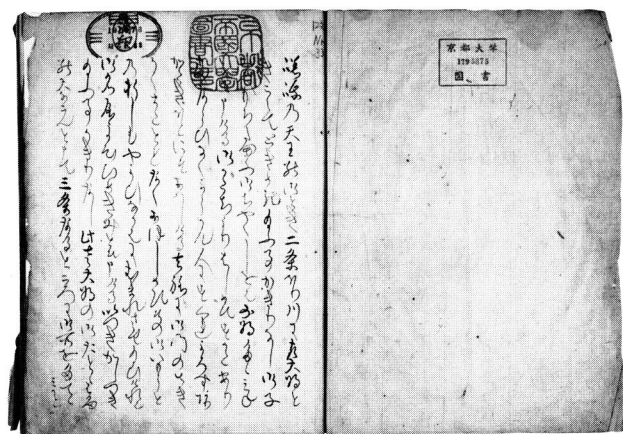
文学部 美学||別置||622 <159468> 上下2冊 写本 製
作年, 製作者, 書写者不詳 大和綴 金泥庭草絵紺色表
紙 本文料紙: 斐紙 見返: 布目地金箔置紙 23.5×
17.3cm 無境界 毎片面10行 内題なし, 標題は書題簽
による 本文: 漢字交り平仮名文 挿図: 片面8図, 見開
1図, 彩色(奈良絵本)

不老不死の薬を産するという蓬莱山につ
いて、常世の長鳴鳥、麻姑仙人、田道間守、
徐福、西王母、楊貴妃などの伝承を集めた
もの。最後に紀伊国名草郡のあつみの安彦
の話を載せる。安彦は漁に出て大風に遭い、
蓬莱山に流れ着き、七人の仙女に案内され
て島を見て回った後、不老不死の薬を受け
られて故郷に帰る。帝に薬を奉り、三位宰
相になされた安彦は、自らも薬のおかげで
不老不死となり、最後は仙人となって天上
の仙宮に飛び去っていく。物語大成5に翻
刻。(M)

〔109〕緑弥生*

文学部 国文学||Nr||33 <1795875> 1冊 写本 製作
年, 製作者, 書写者不詳 四つ目袋綴 内曇表紙 本文
料紙: 楮紙 27.8×21.7cm 無境界 毎半丁11行 内題な
し, 標題は書題簽による 本文: 漢字交り平仮名文

新出作品。嵯峨天皇の時代、左大将には
少将ただみね・弥生姫の二子、弟の大納言
には緑姫がいた。緑姫は幼くして両親をな
くす。弥生姫十七歳、緑姫十六歳の春、両
姫が遊ぶところに桜一枝を手に入十九歳に
なった少将が訪ね入り、緑姫を見初める。少
将は姫の乳母小侍従の手引きで思いを遂げ
たが、父の命に従い大炊殿の姫君を妻に迎



〔109〕 緑弥生

える。少将が内裏の遊びで留守の間に緑姫は邸から追い出され、大原に退く。事情を知った少将は神仏に祈請、諸方を歩き回る。緑姫は出家を願うが周囲が許さない。女院に出仕することとなった緑姫を帝が見初め、麗景殿に迎える。それ以前弘徽殿に入内していた弥生姫は落胆、左大将も仕打ちを後悔する。一方少将は再度の逢瀬の望みが絶たれ、二十歳で思い死ぬ。麗景殿は皇子二人姫一人を生む。皇子は十二歳で即位して文徳天皇となり、姫は十二歳で伊勢斎宮、二宮は十歳で東宮に立つ。帝后は院号を受け栄えた。

いわゆる「しのびね」型であり、前半は『若草物語』に、後半は『しぐれ』に近い。ただし、少将と緑姫との間には子はもうけられず、少将は出家ではなく思い死を遂げる。また物語末尾に付された「されば人は情け深くあるべし」との教訓は左大将の計略が結果的には一族の悲劇を招いたところから導かれるのであろう。(S)

〔110〕 紫式部の巻

附図 4-40||ム||1 <17734> 1冊 刊本 明暦4 (1658) 年 [京都] 藤井五兵衛 五つ目袋綴 雷文地蓮華唐草空押濃紺表紙 本文料紙：楮紙 27.2×18.1cm 無境界 每半丁10行 刷題簽書名：紫式部巻 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 挿図：片面5図、見開2図 蔵書印：「田邨」(朱文)

本書は石山寺の縁起に基づくお伽草子『石山物語』の第四冊と推定されているもので、石山寺の観音の靈驗譚と結びつけて、源氏物語が菩提をすすめる書であることを説くものである。紫式部は上東門院の命により、石山寺に参詣し源氏物語を書くが、その源氏物語は菩提をすすめるために観音

が紫式部に作らせたものであった。後に石山に参籠中の澄憲が観音の夢告を蒙り、紫式部のために源氏供養を行い、その中で源氏表白として知られる源氏物語の巻名を連ねた表白を読み上げる。(M)

〔111〕 物くさ太郎

附図 4-40||モ||1貴 <1093295> 下1冊 刊本 刊年、版元不詳 五つ目袋綴 銀泥松木立模様濃紺表紙 本文料紙：斐楮混合紙 16.4×24.0cm 無境界 每半丁13行 内題なし、標題は刷題簽による 本文：漢字交り平仮名文、一部振仮名付 挿図：片面5図、手彩色

道に転がっていった餅を拾うのさえ物臭いという物臭太郎ひぢかすは、都で妻を探すように勧められ、夫役のために一人上京する。無事役目も果たした後、妻を探そうと清水寺に詣でた太郎は、美しい女房をみつける。何とか逃げようとする女房の出す謎を次々と解き、女房の局を探し当てた太郎に、女房も観念し、一晚のもてなしをする。和歌をふまえたやりとりを重ねるうち、女房は太郎の外見に似ぬ心ばえに気づき、二人は結ばれる。その後太郎を風呂に入れると玉のような男になり、ついには帝の叡覧にあずかり、太郎の高貴な血筋が明らかになる。信濃の中将に任じられた太郎は女房と共に豊かに暮らし、最後には夫婦そろって神となる。本書は御伽文庫版の本文と挿絵を基に、彩色したものである。(M)

〔112〕 紅葉合

附図 4-30||モ||1 <32659> 1冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 四つ目袋綴 内曇表紙 本文料紙：楮紙 26.2×19.1cm 無境界 每半丁9行 内題なし、標題は書題簽による 本文：漢字交り平仮名文

『玉水物語』の別名作品。物語展開は

〔57〕にほぼ等しいが、所々に描写の相違がみられる。たとえば、玉水をそねむ人々が犬を恐れる彼女の姿をみて狐の化けたものかと疑ったり（『玉水物語』にはない）、紅葉合の場面（書名の由来）が詳細になっていたりする。女に化けた狐が姫に仕えるに至るくだりや玉水が紅葉を探しに出る場面、母に憑いた狐と対峙する場面も異なる。特に結末部の方向は全く違い、『玉水物語』が狐のあわれの物語として結ばれるのに対して、『紅葉合』は稲荷の霊験を説き姫の長寿栄華を語る。物語大成13に翻刻あり。（S）

〔113〕わかくさ物かたり（若草物語）

文学部 国文学ⅡNr134a <175298> 上中下1冊 刊本
刊年、版元不詳 四つ目袋綴 薄茶色表紙 本文料紙：楮紙 26.6×19.1cm 四周単辺 每半丁14行 刷題篆書名：わか草物語 中巻首題：わか草ものかたり 柱題：わか 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面14図、見開3図 蔵書印：「中井文庫」（朱文、印主：中井浩水）、「永田文庫」（朱文、印主：永田有翠） 落丁あり

散逸王朝物語『よをうち川』の改作と目される悲恋遁世譚。先の関白の一人娘の若草は、幼くして両親に死別し、叔母の按察大納言北の方に養育される。やがて大納言の息少将と結ばれ、女兒を儲ける。しかし大納言は少将に三条の宰相の娘との結婚を強要、気が進まぬ息子の様子を見て、少将の留守中に若草を追い出す。幼い姫君とも引き裂かれた若草は、宇治川に身を投げる。少将は、長谷観音の示現で若草の死を知り、出家して山々を修行した末、熊野で往生を遂げる。息子を失った大納言夫妻も出家し、往生を果たした。残された姫君は、成長して亡母の菩提を弔い、その往生の瑞相を夢に見たという。

本書は落丁のため、本文と挿絵の一部を欠いている。なお、本作品の諸本の中には、入水した若草が観音の利生で助かり、幸福な結末に終わる異本もある。（K）

〔114〕わかくさ物かたり（若草物語）

文学部 国文学ⅡNr134b <114457> 上中下1冊 刊本
天和3（1683）年 江戸〔鱗形屋三左衛門〕 四つ目袋綴 濃藍色表紙 本文料紙：楮紙 26.6×18.3cm 四周単辺 每半丁14行 中巻首題：わか草ものかたり 柱題：わか 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面15図、見開3図

本書の本文・挿絵は、〔113〕とほぼ一致する。ただし、末尾部分が損傷し、刊記

の書肆名が欠けている。（K）

特別展示

<奈良絵本になった幸若舞曲>

〔115〕しつか（静）

文学部 標本Ⅱキ13 上下2軸 写本 製作年、製作者、書写者不詳 卷子 空五倍子色布表紙 本文料紙：楮紙（上）31.2cm、（下）31.4cm 無辺界 每半丁10～11行 本文：漢字交り平仮名文 挿図：18図、彩色（奈良絵本）もと冊子を改装

十六世紀に流行した語り物の芸能「幸若舞」は、近世には読み物としても普及していった。その中でお伽草子と同様に、奈良絵本として制作された舞曲もいくつかあり、この「しつか」もその一つである。

梶原景時が、義経の妾静御前の行方を尋ねる辻札を立てたところ、密告により静と母の禪師が捕らえられる。鎌倉で頼朝と対面した静は景時により胎内探しをされることになるが、母の禪師が頼朝の北の方に嘆願したため助けられる。静は土肥実平のもとに預けられるが、生まれた子が男子であったため子供は梶原景季によって由比ヶ浜で殺される。その後静の学問をしたって北の方たちが集まり、静に伊勢物語の奥義などを尋ねる。さらに若宮で頼朝や諸大名たちの居並ぶ中舞を舞い、所領や俸禄を受けるがすべて寄進し都へと帰っていった。本文は大頭流の系統に属するといえようが独自の本文箇所も多い。

今回初紹介資料。

〔116〕ゑほしおりさうし（烏帽子折草紙）

附図 4-40ⅡエⅡ1貴 <9237> 上下2冊 写本 製作年、製作者、書写者不詳 五つ目袋綴 藍色表紙 本文料紙：斐紙 見返：蝶秋草絵斐紙 34.1×25.2cm 押界 每半丁10～11行 内題なし、標題は書題簽による 本文：漢字交り平仮名文 挿図：片面26図、見開9図、彩色（奈良絵本）

「しつか」と同様、幸若舞曲の「烏帽子折」を奈良絵本の形にしたものであり、源義経を主人公とする一連の舞曲の一つである。

金商人吉次に連れられて奥州に下る牛若は、鏡の宿にて素性を隠して烏帽子折を尋ね烏帽子を誂える。代金に源氏伝来の刀を与えるが、義経の父義朝の乳母子鎌田正清

の妹であった烏帽子折の妻は刀を見て牛若と知り、錢に刀を返す。牛若はただ一人で元服の儀を行い義経と名乗る。次に青墓の宿にて遊女の君の長の所望により草刈笛を吹く。義朝の妾であった君の長に義経は素性を明かし、義朝・義平・朝長ら父子三人の御影を祀る阿弥陀堂に案内される。まどろんでいると枕元に三人が現れて義経を励まし、さらに盗賊の夜討の計画があることを告げる。熊坂長範ら盗賊が夜討をかけるも、義経によって散々に討ち取られる。また挿話として、君の長により用明天皇の草刈笛の由来譚が語られる。本文は幸若系と大頭系の混合形態である。

参考展示

＜各作品中での弁慶＞

参考として『弁慶物語』周辺に位置する作品を数点展示した。弁慶が実在した人物であることを示す歴史資料は『吾妻鏡』（文治元年十一月三日・六日条）しかない。そこでは義経配下の一武将として名が挙げられているにすぎず、そのひととなりは知られない。現在わたしたちが抱く豪快な弁慶のイメージは『義経記』『弁慶物語』といった物語を通じて醸成され、近世の浄瑠璃、歌舞伎の諸作品によって広まったものであった。意外に思われるかもしれないが、『平家物語』でも文章を追う限り、一人当千の武将としての紹介程度の登場であって、勇猛に活躍する姿は描かれない。だが江戸時代に刊行された本、つまり色々な弁慶伝説に親しんだ人々が手にした本の挿絵では、頬髭を生やし七つ道具を背負った姿で描かれている。（S）

○吾妻鏡〈寛永3（1626）年刊〉

鎌倉幕府の編纂になる歴史書。

○平家物語〈延宝5（1677）年刊〉

源平合戦を描く軍記物語。鎌倉時代中期頃の成立かと推定されている。異本の多い作品であるが、本書は流布本系。

○義経記〈元和寛永（1615～44年）頃刊〉

源義経の一代記。室町時代の成立と考えられ、様々な義経伝説、弁慶伝説を集成する。

○橋弁慶（下懸謡本の内）〈安永5（1776）年刊〉

弁慶と牛若（義経）の五条橋での出会いを描く。

○舟弁慶（下懸謡本の内）〈同前〉

船出した義経一行の前に現れた平家の怨霊を弁慶の力で退散させる物語。

【主要参考文献】

市古貞次『中世小説の研究』（1955.12）

松本隆信「擬古物語系統の室町時代物語－「しぐれ」「若草」「桜の中將」「志賀物語」外－」（『斯道文庫論集』4、1965.3）

松本隆信「擬古物語系統の室町時代物語（続）－「伏屋」「岩屋」「一本菊」外－」（『斯道文庫論集』5、1967.7）

岡見正雄博士還暦記念刊行会『室町ごろ－中世文学資料集』（1978.9）

奈良絵本国際研究会編『御伽草子の世界』（1982.8）

日本文学研究資料叢書『お伽草子』（1985.6）

徳田和夫『お伽草子研究』（1988.12）

松本隆信『中世における本地物の研究』（1996.1）

渡辺守邦、島原泰雄共編『蔵書印提要』（日本書誌学大系44、1985.3）

執筆

金 光 桂 子

（京都大学大学院文学研究科
国語学国文学専修）

柴 田 芳 成

（京都大学大学院文学研究科
国語学国文学専修）

橋 本 正 俊

（京都大学大学院文学研究科
国語学国文学専修）

古 川 千 佳

（京都大学附属図書館情報管理課
目録掛）

本 井 牧 子

（京都大学大学院文学研究科
国語学国文学専修）

展示会の概要

<経過>

京都大学附属図書館では、毎年、所蔵資料を中心とした公開展示会を開催してきました。今年度は、附属図書館が創立百周年を迎えるということもあり、その記念行事の一つとして、「お伽草子」をとりあげ、11月29日の記念式典の前後14日間にわたって開催することになりました。そして1999年5月13日にワーキンググループを発足させ、具体的な準備を開始しました。

この記念展示会の担当は情報サービス課とし、総務課、情報管理課からも担当者を選び、主査は情報サービス課の専門員が当たることにしました。また、附属図書館の研究開発室室員の木田章義教授（文学研究科）にお願いし、専門分野の協力者として、文学研究科国語学国文学専修の大学院生2名の推薦をいただきました。以後、前記2名の大学院生に新たに2名の大学院生を加え、ワーキンググループの会議を定期的に行い、準備をすすめてきました。（担当者の氏名は別項）

<「京都大学所蔵お伽草子目録」の作成>

今回の展示会にはいくつかの特色があります。

まず第1に、京都大学におけるお伽草子の所蔵を調査し、「京都大学所蔵お伽草子目録」を作成しました。お伽草子は、現在400種以上の存在が確認されていますが、この目録は90種、136点を収録しています。その中には「緑弥生」のような新出作品があります。今回の作業において準拠した「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」の所蔵に記されていないものもいくつか発見されました。

<奈良絵本中心に展示>

実際の展示作品は、親しみやすさを考え、美しく彩色されたいわゆる「奈良絵本」を中心に87点を選び、そのいくつかについては、全挿図（100枚以上）をカラー写真のパネルにしました。『きふね』は総合人間学部で新しく見つかった奈良絵本です。

<特別展示、参考展示>

幸若舞曲の奈良絵本2点を特別に展示しました。とくに『しつか』（文学部所蔵）は初めて見出され展示されるものです。また記念講演のテーマである『弁慶物語』にちなんで、その挿図を大型パネルにするとともに、弁慶関連の作品を展示しました。その中には、弁慶が実在したことを示す唯一の歴史資料といわれる『吾妻鏡』もあります。

<電子展示>

京都大学附属図書館では、貴重書を電子化し、電子図書館（<http://kulib.kyoto-u.ac.jp>）で公開し、いつでも・どこでも・だれでも見るができるようにと努力しています。せっかくの機会ですので、展示会場に電子図書館用の端末を置いて、これらを見ていただきます。絵巻を連続的に巻物として画像にする工夫もあります。

<白描画に着彩>

『御伽文庫』二十三編のうち、いくつかの作品について現代的感覚で彩色をほどこし、新しいお伽草子の世界を現出させました。題して「お伽草子で遊ぶ」。着彩は、パソコンや水彩、クレヨンなど。11月27日（土）、28日（日）の両日は、パソコン2台を置いて、子どもたちに「ぬりえ」を試みてもらう企画もあります。

展示一覧

- 〔 2 〕 秋の夜長物語
- 〔 5 〕 雨やとり
- 〔 6 〕 雨やとり
- 〔 8 〕 あろ物語
- 〔11〕 一休和尚佛鬼軍
- 〔12〕 いはや
- 〔14〕 魚太平記
- 〔16〕 御伽文庫
- 〔18〕 雁のさうし
- 〔19〕 かむ丞相
- 〔20〕 ぎわう
- 〔21〕 きわう物語
- 〔22〕 祇園牛頭天王御縁起
- 〔25〕 きふね
- 〔26〕 きふねの本地
- 〔27〕 くま野
- 〔28〕 くるま僧
- 〔29〕 車僧ノ巻物
- 〔32〕 御すいてん
- 〔35〕 西行物語
- 〔39〕 さよひめ
- 〔40〕 さるげんじ
- 〔42〕 しほやきぶんしやう
- 〔43〕 四十二の物あらそひ
- 〔44〕 しのひね物語
- 〔48〕 酒飯論繪寫
- 〔49〕 しやうるり
- 〔50〕 諸虫太平記
- 〔52〕 諏訪縁起物語
- 〔54〕 草木太平記
- 〔55〕 たなはた
- 〔56〕 たなはた
- 〔57〕 玉水物語
- 〔58〕 たまみつ物語
- 〔60〕 たまも
- 〔61〕 玉ものまへ
- 〔62〕 たま藻のまへ
- 〔63〕 たまものまへ
- 〔67〕 付喪神

- 〔68〕 鶴のさうし
- 〔69〕 天竺物語
- 〔70〕 天神御縁起
- 〔71〕 東勝寺鼠物語
- 〔73〕 七くさ
- 〔77〕 はちかつき
- 〔80〕 はちかづきのさうし
- 〔83〕 花みつ
- 〔84〕 はもち中納言
- 〔85〕 火おけのさうし
- 〔86〕 びじんくらべ
- 〔88〕 ふくらう
- 〔89〕 富士草昏
- 〔90〕 ふじの人あなさうし
- 〔94〕 佛鬼軍
- 〔95〕 ふんしゃう
- 〔96〕 ふん正
- 〔99〕 平家花揃
- 〔100〕 弁慶物語
- 〔102〕 弁慶物語
- 〔103〕 弁慶物語
- 〔104〕 ほうさうひくのさうし
- 〔108〕 ほうらい物語
- 〔109〕 緑弥生
- 〔111〕 物くさ太郎
- 〔112〕 紅葉合

特別展示

- 〔115〕 しつか
- 〔116〕 ゑほしおりさうし

参考展示

- 吾妻鏡
- 平家物語
- 義経記
- 橋弁慶（下懸謡本の内）
- 舟弁慶（下懸謡本の内）

あとがき

本図録は、京都大学附属図書館創立百周年記念公開展示会「お伽草子―物語の玉手箱―」の出陳図録として編集したものであります。今回の展示会では、附属図書館所蔵の資料だけでなく、文学部及び総合人間学部所蔵の貴重な資料をもあわせて展示させていただきました。ご協力いただいた両学部の関係各位に深く感謝いたします。また本図録中の「京都大学所蔵お伽草子目録」には、展示資料だけでなく、京都大学所蔵の「お伽草子」全てを網羅的に収載することを期して作成いたしました。今回の展示会を通じて「お伽草子」の世界に興味を持たれた方への、さらなるご案内の一助となれば幸いです。

本図録の作成に当っては、各執筆担当者の方々には、本務多忙のところ誠に多大なご協力をいただきありがとうございました。ここに記して謝意を表します。

(編集担当：田中耕二)

<記念講演会>

演題： 弁慶像の展開―御伽草子『弁慶物語』―

講師： 池田敬子氏（京都府立大学教授）

日時： 11月29日（月）午後1時半～3時

会場： 京都大学附属図書館A Vホール

担当

＊担当課長・片野孝保（京都大学附属図書館情報サービス課長）、主査・澤居紀充（情報サービス課専門員）、委員・田中耕二（情報サービス課資料運用掛長）、濱口敦子（情報管理課電子情報掛）、中藪重美（総務課経理掛）、中川美恵（総務課経理掛）、堤豪範（情報管理課専門員）、古川千佳（情報管理課目録掛）

＊協力者 柴田芳成（京都大学大学院文学研究科国語学国文学専修）、本井牧子（同）、金光桂子（同）、橋本正俊（同）

＊電子展示 情報管理課電子情報掛、同システム管理掛

＊着彩 『浦島太郎』明川浩子（情報サービス課資料運用掛）、『猿源氏草紙』・『物くさ太郎』中川美恵（前掲）、『浜出草紙』坂野加代子（情報サービス課参考調査掛）、『からいとさうし』・『はちかつき』菅原領子（京都大学大学院文学研究科国語学国文学専修）

お伽草子 ―物語の玉手箱―
京都大学附属図書館創立百周年記念公開展示会

1999年11月24日

編集・発行 京都大学附属図書館

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

印刷 (企)昭和堂印刷所

〒606-8225 京都市左京区田中門前町73